



目次

小松ヒサさん証言（9歳、国民学校4年生、千葉市矢作町）	130
匿名証言（31歳、主婦、旧千葉市稲毛2丁目）	131
高宮一彦さん証言（11歳、小学校6年生、千葉市新田町187）	134
時田茂さん証言（14歳、軍属、千葉市道場北町）	135
児玉静子さん証言（10歳、小学校4年生、旧千葉市吾妻町、宗胤寺）	137
高橋徹さん証言（14歳、工業学校2年生、千葉市道場南）	140
齋藤哲子さん証言（13歳、高等女学校2年生、千葉県長生郡）	144
本木淑子さん証言（15歳、高等女学校4年生、千葉市東本町37）	146
渡辺文江さん証言（4歳、千葉市本千葉町119）	150
春山信夫さん証言（15歳、中学校4年生、千葉市黒砂）	151
高橋美佐子さん（旧姓・飯島）（当時県立千葉高女四年生・十五歳） p416-p423	154
（2）千葉市以外における国内での戦争体験（空襲、業務、疎開、戦争生活）（28人）	158
a. 県内（6人）	158
尾本ハルさん証言（17歳、農業従事、海上郡豊岡村）	158
鈴木久子さん証言（8歳、小学校3年生、旧夷隅郡千町村荻原）	163
神作みつさん証言（9歳、国民学校3年生、旧千葉県香取郡小御門村）	167
長橋保さん証言（17歳、中学生4年生、勤労学徒動員、千葉市白旗）	170
秋葉ていさん証言（35歳、主婦、成東町木戸）	173

小松ヒサさん証言（9歳、国民学校4年生、千葉市矢作町）

私は戦前と戦後も同じ場所に住んでいる。近所は空襲で1軒の家が焼失したが、私の家は焼け残ったからである。当時の私の家族構成は、両親、祖父母、私、妹、弟である。父は東京湾漁業の海苔や貝を採る小型木造船の船大工であった。当時父は、40代であったが、出征しなかった。母は「お父さんは船大工だから戦争に行かなくてもいいんだよ」と言っていた。家は千葉大学医学部の現在矢作トンネル入り口辺りにあった。私は、都国民学校の4年生であった。

私の家の防空壕（三畳）は立派であった。父が船大工だったから、厚い船板廃材を利用してしっかりしていた。中には家財道具や布団、荷物が収納されていた。

1945年6月10日朝に蘇我で空襲があったと聞いて気になっていた。私は午後になって大学病院に行って見たら、負傷者が続々と大学病院に運ばれていた。病院建物内に収容されないままの負傷者もいた。重傷者から手術を受けていたと思われた。私は、松の木の下に横たわっている30代の若い女性に「痛いですか」と尋ねた。彼女は青ざめた表情で「今は痛くない」と答えてくれた。彼女が、どうなったか心配であった。私は病院の中に入ることはしなかったが、大勢の患者がいたと思う。

終戦の年の夏には、警戒警報のサイレンが頻繁に鳴った。艦載機による空襲が結構な頻度であった。下校時に艦載機が不意にやってきて機銃掃射をしかけた。私たちは林の中に入り木の陰で伏せた。おかげで、子どもたちは無事であった。艦載機は低空を飛ぶので機影がよく見えた。B29は高度が高いので小さく見える。

7月6日の夜、焼夷弾による千葉市の空襲が始まった。私達は既に防空壕にいた。父の作った防空壕は安全だと信じていた。私たちは子どもなので、防空壕から外へ出ることは余りなかったが、大人たちは弁天池（矢作町にある池で今は〇〇公園になっている）の上の家が燃えている。土手の向こう側の大学の木造建物も炎上していると言っていた。深夜の千葉の空は火災で明るく見えた。その後、子どもたちは防空壕で眠ったらしい。空襲後日に親に連れられて街に行った時、焼け野原になった千葉市の中心街を見た。

また、近所の空襲被害は斑（むら）があった。弁天池の上の家には焼夷弾がまとまって落ちたらしい。近くの池の桜の枝にも長さ約50cmの不発焼夷弾が引っ掛かっていた。

8月15日の終戦放送は家にラジオがないので聞いていない。隣の家に行ったらもう放送は終わっていた。隣人は「日本が戦争に負けたよ」と言った。私は、戦争が終われば明日から空襲がなくなるのでホッとした。両親は戦争の

話をあまりしてくれなかった。

そして、戦後、燃えなかった母校で授業が再開された。戦後の6,3,3学制改革で生徒たちは、これまでの小学校高等科が中学校に義務制として延長されること、その上に高等学校が出来ることに夢がった。

戦災で焼け出された近所の人々が、旧畜産試験場（現在、県立青葉公園）の官舎に移転した。町内回覧板を持ってそこを訪れるのは養豚場で可愛い豚の子（黒、白あり）どもが見られたから楽しかった。

戦後、県庁の近くの焼け残った建物（名前はわからない）を接收し、進駐軍が駐屯していた。そこにも制服兵隊が立っていた。鬼畜米英という感じはしなかった。私の前の家の人々は戦地から帰って来た人であるが、子どもたちがいい加減な質問をした時、その人は「戦争は怖いものだ」と言っとうんと怒られたことを覚えている。

父の仕事は平和産業なので、戦時中も、戦後も仕事がなかった。やむなく戦後は、船の塗装を始めたが、事業としては苦しかった。結局、泉水造船の塗装部門に雇用されて生活が安定した。しかし、私は、高校に進学するゆとりはできなかった。私は、中学校卒業後、授業料が免除される国立療養所准看護学院で勉強した。同校を卒業後、松籟荘（現在、千葉社会保険病院となる）で准看護婦として働いた。

戦争は、私の人生で嫌な思い出である。戦争は反対である

匿名証言（31歳、主婦、旧千葉市稲毛2丁目）

戦前、私の家族は、夫と私、母、長男(2歳)と二男(11か月)であった。夫は稲毛の加藤製作所で働いていた。当時の工場は軍需工場となっており、加藤製作所は戦車の部品を製造していたらしいが、夫は機密保持の立場から、仕事のことは妻にも言わなかった。

夫は、父親の死によって中学校は中退を余儀なくされたが、仕事はできた。能力検定1級に合格していた。父が軍需工場の技術指導に欠かせないと判断されたので、夫には召集令状が届かなかった。私は、千葉高女で5年間みっちり勉強させてもらった。当時は、英語が敵性語となっておらず、英語を読むことは少々できる。千葉高女卒業後、花嫁修業を1年間やった。父は、これからは女が家にいるより世間で働いた方がよいという考え方であったので、千葉県農政課外郭団体の産業組合（現在に生活協同組合に当たる）の生徒20人募集に応募した。身分証明書、推薦状等の書類を揃えて受験し、合格した。そこで、金融、法律、事務を修学して、県庁近くの千葉県信用組合連合会に採用された。

職業婦人になれたことは、嬉しかった。この間に満州事変もあった。

1940年（昭和15年）に安藤と結婚して、千葉市に住んだ。長男が1942年に誕生した。この頃から、戦争が激しくなり、経済が統制されてきた。食料や衣料は配給制になった。闇で買うこともできるが、闇は高額であったので、簡単に買えなかった。食料が不足すると、母乳の出が悪くなり、米を粉末にして水につけた後で、煮て重湯にして乳児に食べさせた。米は大人が食べないで、乳児の栄養源となっていた。米が不足すると親戚から米を借りて重湯を作った。政府が供給した粉ミルクのような代用品は砂糖を加えなければ食べられなかった。配給手帳は名刺の2倍の大ききで、みすぼらしい紙であった。これで、哺乳瓶と哺乳乳首を購入した。千葉市蘇我に20数年いたが、家屋が空襲でない火災にあって焼け出されたために、千葉市院内町に引っ越した。近くには、小さな診療所、鯉のぼり店、箒屋、米屋、傘屋があった。

1945年6月10日朝8時ごろ、千葉市蘇我、千葉市街の千葉高女、千葉女子師範学校、鉄道機関区への250kg爆弾による空襲があった。千葉高女でも生徒が死んだ。女子師範も犠牲者がでた。蘇我には、知り合いが多くいたが、爆弾の投下位置から考えると、もし蘇我に住んでいたら、私の家族は死んでいただろうと思う。戦争の成り行きを冷静に見ていたので、蘇我の空襲を教訓に、「これからは、家を所有するのではなく、借家に住んで避難しやすいようにする」と決めた。

1945年7月6日の焼夷弾による空襲は、夜半から開始された。私の家族は、6月10日の蘇我の空襲の恐ろしさを知らされたので、千葉市院内から、旧印旛郡中郷村新妻（現成田市）へ叔母の家を訪ねて疎開していた。大切な家財は中郷村に運んだが、普段着等の日常用品は牛車で運び出す予定にしていたが、牛車が確保できず、日常用品は焼けてしまった。千葉市の夜間空襲は成田からも、炎や煙が夜空に見えた。当初、空襲は佐倉市だろうと思ったが、千葉市であった。火の海の千葉市にも多くの知り合いがいたので心配であった。空襲後の7月に、千葉市に戻ると、市街地は焼け野原だったので千葉駅から、迷彩を施した千葉大学病院の建物が見えた。院内町の近所の動物を飼っていた家も焼けていたが、猫1匹と鶏1羽が戻ってきてたとかが、哀れだった。千葉の身内の話では、次のようなことがあったそうだ。軍刀を下げた退避した軍人が、田んぼで機銃掃射に会い、田んぼに伏せて逃げたので、命は助かったが泥んこになり軍刀も紛失したという。また、大学病院の近所の人、普段教えられたとおり都川沿いに逃げた人は機銃掃射で亡くなったが、避難コースの逆方向に逃げた人が助かったと言う。アメリカ軍は先ず周辺に爆弾を落とし、避難民を中央に集めて、機銃掃射を浴びせたと言う。

7月には、千葉市稲毛に戻った。その夜に、川崎市に対する空襲があった。東

京湾を隔てても、爆弾の破裂音が「ドスン、ドスン」と響いていた。稲毛で空襲になると、小高い所に共同防空壕へ逃げた。真っ暗闇に乳児を入れると、不安を感じて泣きだした。声を出されたのでは、怒られるので、母乳を押しつけていた。夜は灯火管制のために避難路は真っ暗で左によると、線路に落ちる危険があった。大きさは20-30人収容できる。ある日、稲毛から配給を受け取るために、千葉に行ったが空襲警報になり、建物の軒先で動けなくなった。漬物屋の小僧さんが、店から「焼け残った漬物ですが、食べてください」漬物を振る舞ってくれた。その日は、上りの列車が動かないので、仕方なく線路沿いを歩いて帰った。当時は、これぐらいの距離は歩けた。

銃後の国民には、防火訓練、竹槍訓練等への参加が強制されたが、私は、妊娠中であつたので訓練を免除されていた。子どもを産むことは「産めよ、増やせよ」の国策に沿っていたから当然に免除されていた。戦争に疑問を持たない国民はいなかった。公には戦争を批判することはできなかつた、信頼出来る仲では、「この戦争勝てないよ」、「勝った、勝ったと言っているが、あれは嘘だよ」とか「早く戦争はやめてもらいたいね」と話し合った。このあたりには、憲兵や特高警察は見かけなかつた。空襲に備えて、私はいつも、もんぺ姿で寝ていた。枕元には、子どもの必需品、子どもを寝かせる蓆を用意していた。いざ、空襲の時は、私が長男を背負い、母が二男をおんぶして避難した。綿入れの防空頭巾を長男に被せても、夏で暑いからすぐに捨ててしまった。

空襲は私の家族の逃げた後に、やってきたから、私の家族は全員無事であつたが、30人ぐらいの従兄弟は2人が戦死した。親戚の中で、10代の志願兵の息子が戦死する悲しいケースがあつた。

1945年8月15日の天皇による敗戦放送は近所の4-5人で聞いた。土に埋めであつたラジオは雑音がひどかつた。天皇の声はくぐもっており、ウワンウワンと変な抑揚があつたので分かりにくかつた。しかし、「忍びがたきを忍び、耐えがたきを耐え」と言うところで、私は、戦争が終わったと理解した。近所の人たちも「よかつた」と声をだしていた。もう戦争が終わったから本当の言葉が出たのであろう。今夜から明るい夜が過ごせるのだ。

稲毛の加藤製作所の別の社宅では、強制的に連行されてきた朝鮮人徴用工が夜通し、「マンセイ、マンセイ、マンセイ（朝鮮語の万歳に当たる）」を叫んでいた。朝鮮人にとっては、日本の敗北は祖国の解放であつた。私は、この朝鮮人の人たちとは日常的に接触はなかつた。

戦後、夫は軍需工場を解雇され、私も子どもの出産を機に信用組合を退職していたので、生活は苦しかつた。戦後は、砂糖の配給とニンジン、大豆の配給は山ほどあつた。砂糖は黒砂糖で、1人1キログラムもあつた。戦後、さらに二人の子供に恵まれた。

戦争は、絶対にしてはいけない。憲法 9 条を改正してはいけない。戦争の記録より、運動の実践が大切であると思う。

高宮一彦さん証言（11 歳、小学校 6 年生、千葉市新田町 187）

私は、当時千葉市立第一尋常小学校から分離した昭南国民学校に通学していた。別れた本校は、千葉市立富士見国民学校と名前を変えた。「昭南」という名称は、1942 年日本軍が英国軍の砦であるシンガポールを陥落させ「昭南島」と呼称したことに因んでつけられた。終戦後、二つの学校は旧千葉高等女学校移転跡地に新宿小学校として一つになった。私の家は井上病院の前にあった。家族構成は、両親、私と妹二人の 5 人家族であった。父は、30 代後半の注文洋服仕立て業であった。国有鉄道での公傷退職者であるため召集されなかった。

終戦の年、都市空襲がはげしくなった時、本千葉駅からの引き込み線が敷設されていた日東製粉千葉工場までの線路脇区間の住宅を強制疎開させ、類焼防止と作戦を容易にする目的で、戦車を使って破壊し整地した。そのため私の家の裏手にあたる線路際には長さ約 800m、幅約 20m の空き地が作り出されていた。私の家はこの空き地を背負う形で表の道に面していた。

1945 年 6 月 10 日、私はいつものように朝 6 時に新宿町にある只縄新聞店に行って、地域に配達する新聞を受け取り、下級生に分配し、自らも配達し終えて、8 時には家に帰り着いた。新聞配達は大人が召集されたために生徒が自発的に従事していた。この空襲の第 1 段は日立航空機工場のある千葉市蘇我であった。蘇我空襲の関係で 8 時には警戒警報が発令されていた。私は友人の北林君の家に向かったが、間もなく、空襲警報となったので、途中の石井君の家に避難した。機影と思われるものが頭上を通過した時、爆弾が炸裂し轟音とともにあたり一面が真っ暗になった。慌てて布団をかぶり鎮まるのを待った。落ち着いてきたので井上病院の防空壕に入りに入った。防空壕は、すでに近所の人々と共に怪我をされた人達で満員であった。私は、次の攻撃があるかと備えたが、二度目の攻撃はなかった。私が被弾した至近弾の着弾は 50m 位離れた線路脇の踏切番小屋だった。家の周辺には 2m 位のキレたレールも飛んで来ていた。その時、私は鉄兜もなく、防空頭巾もなく無防備であったが、着弾点間の建物が私を救ったと思う。父は町内の警防の仕事に従事し、石井車屋や亀屋酒店の近くにいたが、無事だった。空襲直後、佐官級の憲兵隊将校が罹災状況を視察していた。

私は、日立航空機の部品工場として使われていた千葉高等女学校講堂を狙った爆弾が、千葉病院や千葉復活教会に逸れ、鉄道車両が多く集結している千葉

機関庫を狙った爆弾が、千葉女子師範に逸れたと思う。そのため犠牲者の多くは千葉病院の入院患者と勤労働員されて休日出勤してきていた生徒でなかったかと思う。この爆弾空襲で聖公会復活教会の牧師の娘が新聞配達の中で犠牲となった。爆弾空襲の犠牲者は、戦車で拡幅して出来た空き地に 100 人位並べて検死をしていた。私の友人で、足の膝に爆弾の破片を受けた女子は、摘出が難しい部所とのことで、現在まで破片除去の手術をしてこなかった。戦争被害者としては扱われず自費で治療してきたが、若い時は過ごせても、高齢になるにつれ歩行が困難となり辛いと言うことである。井上病院の花岡先生宅では、台所に爆弾が命中し、奥様はそこで即死、女中さんは爆風で飛ばされて、先生宅の筋向いの家の天井裏に押し込められた。爆弾破裂の爆風で屋根が持ち上がって、落ちるまでの間に人間の体が天井裏に入り込んだと言う。やがて、遺体が腐敗して、天井に染みができ、悪臭を放ったのでそこに死体があることが分かったと言う。

私は爆弾の恐ろしさを目の当たりに体験して、他の罹災状況を見に行こうとする好奇心は消えていた。だから、他の惨状は知らない。我が家の被害状況は屋根瓦がずり落ちたが、柱、床や壁は使用に耐えられるようであった。しかし、雨天には耐えられないと、家を放棄し、6月20日には父の実家のある佐倉に家族で疎開した。その後7月7日の空襲で空き家の家は焼かれた。生活に必要な日用品だけを持ち出したが、家財は焼失した。

戦争を体験して、言えることは自分の置かれている状況をよく知ることであり、国をよく知ることである。そうすれば、方向性や間違いを正す意見を言える環境が出てくると考えている。

時田茂さん証言（14歳、軍属、千葉市道場北町）

私は、院内小学校高等科を卒業して、すぐ下志津陸軍飛行学校（注）に軍属として就職した。仕事は偵察機にカメラを取り付け、偵察をする仕事である。

家族構成は、両親と兄弟4人で、私は3番目であった。父は理髪師であった。40代で兵役についていない。兄は、当時23歳ぐらいであったが、徴兵検査では内痔核で丙種合格であったから、出征しなかった。兄は、木更津の海軍工廠に徴用されて家から木更津まで通勤していた。家の庭には1畳の大きさの防空壕があった。いつも利用するのは母、私、弟の3人であった。父は空襲になると警防団の仕事があった。

小学校5年生から、学校で教育勅語や軍人勅諭等を暗記させられた。この暗記は苦手であった。6年生になると軍事教練が行われて、木刀の突き、木銃の突

きをやらされた。実際の武器はしない。

私は、下志津陸軍飛行場で働いていたので、1945年6月10日の空襲は知らない。6月10日も千葉から四街道に行く鉄道は運行されていた。

1945年7月6日の空襲は夜11時ごろから始まった。千葉駅から北の地域は鉄道連隊、歩兵学校等の軍隊の施設が並んでいた。そこから焼夷弾による空襲が始まった。私は、家から椿森方面が真っ赤に燃えているのを目撃した。兄が私たちに「早く逃げろ」と指示した。防空壕に避難しろとは言わなかった。逃げる場所と押し合う場所は千葉市桜木町の農家の家と事前に確認してあった。桜木町の農家は日ごろから、裏の八百屋を通して野菜を買ったり、理髪店を利用してもらったりした昵懇の間柄であった。私は、単独で道場北から貝塚町の千葉刑務所方面に逃げた。逃げる途中に、猛火によって雨が降ったので、刑務所の農機具小屋で雨宿りをせざるを得なかった。母と弟は別のルートで逃げたが、私に追いついてきた。空襲も終わり、夜が明けて来て、私たち3人は桜木町の農家で会うことができた。兄はどう逃げたかは知らないが、桜木町に来た。父は、警防団の仕事があるので、桜木町に家族と一緒に逃げることはできなかった。父は焼け残った風呂屋と消防署に避難して助かった。やがて、父も桜木町に来て、家族が無事再会できたことを喜んだ。そこで、朝食を御馳走になった。その農家のお世話で10畳の広さの太子堂で宿泊することを許された。太子堂は近所の農家が寄付で立てたものであった。近所の方にはトイレや風呂のお世話になって、そこに約2週間生活した。

その後、実家に戻ると、家は完全に焼けていた。立っていた柱の根元まで焼けて土台の大谷石がむき出しになっていた。庭木も、家具も、防空壕も焼けていた。後で聞いた話では、近所のIさんは立派な防空壕があったので、そこには母と娘が2-3人避難したが、空襲後家族は蒸し焼き状態で死んでいたらしい。終戦後、その家族の二人の兄が戦地から帰国して、家族の死を残念がっていたと聞いた。大規模な焼夷弾空襲は地上が高熱になり、酸素も不足して窒息すると言われていた。空襲で周辺の木造家屋は焼け落ちたので、刑務所、千葉駅、県庁、椿森陸橋（注）等比較的高い構造物が見渡せた。本町電話局は内部が焼けた。

終戦末期、硫黄島が米軍に占領されたとき、飛行学校の佐官級将校が敵情偵察飛行を敢行した。任務は硫黄島がアメリカによって飛行場として利用されるかどうかを確認することであった。米軍の制海権、制空権にある硫黄島への飛行は危険なものであったが、双発機の「新し偵」にドイツ製の優秀なカメラと乗員数名を乗せて出発した。無事、帰還して、現像後、発表会が行われた。極めて高い軍事機密だと言うことで、将校食堂に暗幕が貼られた。現像写真は葉書大であったが、多数のB29が既に駐機しており、滑走路には鉄製網が敷かれ

であった。当時の日本軍の常識では、飛行場建設は長期日数がかかることになっていた。米軍は重い鉄板も使わなかった。飛行学校には陸軍士官学校上がりの将校と一般大学卒業の将校がいたが、陸軍士官学校出は観念的であったが、一般大学出は現実的に考えていた。後者の将校が「これでは戦争に負ける」とつぶやいた。

千葉市に戻って、千葉市鶴沢町の借家で、6畳間に1家族と言う窮屈な生活をしなければならなかった。戦争が終わってから、1946年春に実家の焼け跡に、配給で得られて柱や板でバラック家屋兼理髪店をたてた。飛行学校の木造兵舎を壊して柱や板を牛車で家まで運んで、利用した。

8月15日は、たまたま私は体の具合が悪く家に休んでいた。朝から重大放送があると聞いていたので、近所住民がラジオのある家で終戦放送を聞いた。日本が負けたことは理解したが、戦争に負けたことが悔しいと言う感情はなく、既に家が焼かれており、飛行学校の将校の言ったとおり、実力で負けたのだと思った。体調回復して、飛行学校に戻ったが、8月28日、上官から「明日から来なくてよい」と言われて、給与と退職金を貰った。

戦後、仕事はなく親の経営するあ理髪の技術を兄と一緒に学んだ。私は、戦争に反対である。

(編集委員注) 下志津陸軍飛行学校

偵察を主たる任務とする飛行学校であった。千葉市若葉区側の四街道市境界にあった。現在は、陸上自衛隊高射学校と駐屯地になっている。

(編集委員注) 椿森陸橋

現在も立派な陸橋があるが、当時は国道でなく軍隊の施設と千葉市市街地をつなぐ道であった。当時の陸橋は鉄道列車操車のために軍用道路がしばしば踏切が閉鎖されるので、軍隊の要請で陸橋が架橋された。しかも、戦車が通過できるように強固に建設されたらしい。戦後、占領軍が木更津市から千葉市を經由し、柏、東京、横須賀の各軍事基地を結ぶ道路を建設した時に、椿森陸橋は別の軍事的価値が与えられた。

(編集委員注) 硫黄島陥落

硫黄島をめぐる日米の戦いは、1945年2月16日から3月26日まで続いた。戦死者数は日本軍2万人、米軍6千8百人であった。

児玉静子さん証言 (10歳、小学校4年生、旧千葉市吾妻町、宗胤寺)

私は、宗胤寺の3女として生まれた。宗胤寺の家族は両親、6人の子どもの8人である。終戦時、生活を共にしていたのは、両親、5人の子どもと使用人1

人の8人暮らしである。父は住職児玉栄一である。母は師範学校卒業の元理科教員であった。私は、千葉駅近くの千葉県師範学校女子部（この学校は1945年6月10日の爆弾空襲で全壊・全焼している）の付属小学校の4年生だった。二兄は、千葉中学を中退して、満州の陸軍士官学校に入ったらしい。「満州国」溥傑の部隊に所属したと言う。徴兵検査は甲種合格であった。彼は、戦後シベリアに抑留され強制労働に就かされた。〇〇年兄は無事帰国した。

戦前、宗胤寺は都川を挟んで千葉県庁の西にあり、県庁前通りを挟んで千葉地方裁判所の南にある。戦前、宗胤寺敷地は現千葉日报社や県教育会館まで広がる大きな寺であった。本堂は背が高く一際大きい建物であった。ケヤキの材が使用されていた。戦後、都市計画に基づき、宗胤寺本堂は1950年に千葉市稲毛区弁天町に移転した。墓地は1947年頃から移設していた。2007年に改築された本堂はヒノキ作りである。しかし、戦前の本堂はさらに大きかった。

私の寺には、終戦近い頃、米軍の九十九里上陸を想定して、本土決戦部隊が編成されていた。石川県七尾等の連隊から派遣された部隊が駐屯していた。ここは、県庁に近いので駐屯地に選ばれたと思う。寺には陸軍のトラックが2台常駐していた。将校用の軍馬もいたが、兵隊の総数はわからない。ただ、炊事係の4名の兵隊が宗胤寺に宿泊していた。この兵隊たちとは日ごろから、話ができた。寺側は兵隊に寺を提供し、兵隊たちは家族に食糧などで便宜をはかっていた。母は、近代的な感覚の女性であった。ある日、兵隊たちに「この戦争負けるわよ」と言ったら、兵隊たちは「そんなことは偉い人に言ってはいけませんよ」と母をかばった。又ある日、出張から帰った兵隊のゲートルの間に挟んで持ち帰った少しの米を我が家にくれた。兵隊の中には、長姉と結婚したい者もいた。手紙の字が読めない兵隊に字を教えたりした。この兵隊たちとは、まるで家族のように生活していた。しかし、他の兵隊たちの一部に不心得者がいて寺の物を盗んでいった。

千葉は軍都であったから、高級軍人が戦死すると部隊葬が行われ、父が読経を依頼された。部隊葬の場合、礼砲が鳴った。こんな関係から、軍隊との関係が出来て行った。兵隊の戦死の場合も父は読経を勤めた。白い布で包まれた木箱の中は骨があるはずだったが、実際は戦死した記録が記された木片が入っていた。父は本業の他に町内会長を、母は婦人会長を引き受けていた。母は体が悪いのに防火訓練に出かけた。

沖縄地上戦の司令官であった牛島中将が、宗胤寺に宿泊していた春先、お世話になった母に別れを告げた。母は「どちらに行くのですか」と尋ねたら「南に行きます」と答えた。母は「沖縄ですね」と確認したが、回答はなかった。その後、牛島中将は自決して、沖縄戦は1945年6月に終結した。

1945年7月6日夜間、ラジオが警戒警報を伝えたとき、母は「今夜は千葉だ

よ」と覚悟を決めた真顔で言った。これまでの警戒警報では、本堂の地下室に退避していたが、母は「今日は防空壕に入らないからね」と言いながら、地下室の甕に水を満たし、扉に目張りをした。これは空襲によって発生する火災や熱気の侵入を防ぐためである。この防空壕（8畳の広さ）は兵隊たちが手伝って掘った防空壕でしっかりしていた。しかし、母は防空壕で窒息・焼死した事例を聞いていたのである。父と長兄は本堂を守るために残った。二人は本堂が焼けても、寺の境内が広いから危険から脱出できると考えられていた。いよいよ焼夷弾による空襲が開始された。本堂に焼夷弾が落下して炎上し始めた。父と兄は、本尊等3体を持ち出すことにした。兄が、燃え始めた本堂に入って本尊を抱きかかえて出ようとした時、「しんちゃん、危ないよ」と誰かが声をかけた。その直後、梁が燃えて、屋根が崩れた。兄と本尊は間一髪で救われた。

母と私たちは兵隊と行動を共にした。理由は、兵隊たちが重要書類を非常持ち出しする為にリヤカーを使用した。私の次姉が障害者であったので、避難するにはリヤカーが必要だったのである。兵隊たちは、リヤカーに姉を載せ、小さい子どもを背負ってくれた。子どもを背負った兵隊の歩兵銃は別の兵隊が2丁担いだ。母も腎臓が悪いので、兵隊が助けた。当初、県庁を抜けて大網街道に沿って、千葉寺に逃げると計画であった。しかし、千葉寺本堂が炎上していたので、急遽、千葉大学医学部の防空壕へ向かった。この日の空襲では家族は無事だった。

翌日、寺に戻ると寺は全焼していた。県庁は焼けなかったが、裁判所も含めて寺の周辺一帯は焼け野原であった。本堂の太かった柱が細くなってくすぶっていた。石蔵は残っていた。とても悲しい光景であった。母は、地下室の扉は、周辺の温度が高い時に開けると酸素が入って火災が起こるから、まだ開けてはいけないと言っていた。実際、3、4日後、地下室を開けて、生活必需品をとりだした。駐屯していた兵隊たちはもう戻ってこなかった。焼け跡に消防自動車 came のので、私は、なぜ私に寺に水を掛けなかったのかと聞いたら、手が出せなかったと言った。

戦後、我が家ではハプニングが起こった。一つは13歳年上の長姉が、戦後県庁に進駐した占領軍民生部CICの橋梁技術軍属ローエル氏と結婚することになったのである。つい最近まで日米は敵同士であったから、結婚の自由は認められたが簡単に変わらない社会の目があつた。しかし、両親は結婚を許した。ローエル氏は日本の基地を転勤していた。現在、彼女は未亡人として日本で暮らしている。二つ目は、跡取りの長兄が、事情があつて浅草の寺に養子に入ったので、結局私が宗胤寺を継ぐことになった。現在の夫の援助で寺を守り発展させることができた。皆さまのご支援のおかげである。耳と目が悪くなったが、まだ元気である。

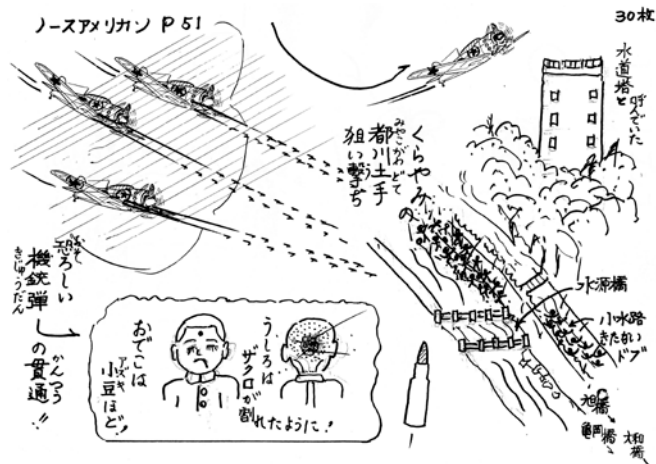
戦時中の思い出の中に、辛いこともある。それは、小さい頃の女の子の友達
は吾妻町の防空壕で母子共に焼け死んだ遺体を見た。その子の名前がいまだに
思い出せない。いい思い出として、苦しい時にみんなで支えあったことを記憶
している。

千葉でも空襲を体験したが、東京大空襲や広島・長崎の原爆被災は大規模な
余りに逃げることもできず悲惨であった。もう、二度と黒焦げの遺体を見たく
ない。戦争は馬鹿げている。私は戦争に反対である。

高橋徹さん証言（14歳、工業学校2年生、千葉市道場南）

当時の千葉市の道場にいた私の家族は、父、叔母、私の3人である。父の職
業は元千葉鉄道連隊曹長であった。父は、退役後、明治生命に就職していた。
そのため、庭に作った防空壕（畳1枚の広さ）は、深く掘らずに柱を建て、梁
をのせて、土で被せた物であった。土基礎が石炭ガラであり、30cmも掘ると水
が出たためである。そこには、重要な生命保険契約書が保管されていた。人間
は別の防空壕を使用した。母と弟、妹は旧山形県西山村郡川土井村（現在、西
川町）に縁故疎開していた。兄は千葉中学を5年で中退し、海軍気象部観測兵
として志願し、小田原〇〇隊に所属していた。私が千葉市院内小学校の生徒で
あった時、母校からサイパン島の小学校に教師を1名派遣するよう指示があっ
た。書道の本多市太郎先生が選ばれた。この先生の影響で私は、書道と生涯関
係が出来た。千葉大学百年史によれば、その先生は、出発時に日本刀を持って
行った。サイパン陥落時に犠牲になられたと思う。

私は、千葉商業学校で勉強したかったが、千葉市蘇我の埋め立て地に日立航
空機の軍需工場が出来ると、商業学校が「航空工業学校」に変身した。学校で
の授業はなくなり、毎日、軍需工場で航空機の製造に従事させられた。学校で



は1年生の時、木銃で藁人形を
突く「撃剣訓練」が求められた。
精神訓練では、真冬雪が積もる
校庭に正座させられ、軍人勅諭
（注）と戦陣訓（注）を完全に
唱えられた者は雨天体育館に来
てもよいと言う非科学的な押し
付けがあった。暗記していない
者は、尻の下の雪が解けて、下
半身を麻痺させてしまった。私

は、暗記が不得意ではなかったが、身長は小柄であったために障害越えができなかった。その時の指導員は、後に阪神タイガーズの掛布選手の父君で、「高橋、おまえはもうよい」と庇ってくれたことを記憶している。しかし、軍国主義教育であったから、上級生が威張っていた。ある日、田圃道を登校中に上級生に拳手の敬礼をしなかったことを口実に二人の上級生から殴られた。思い切り殴られたので、私は一時期、耳が聞こえなかった。

千葉市道場南の自宅から、工場まで徒歩で通勤した。工場では、私の仕事である零式戦闘機の座席周りの部品製作部門で働く動員学生は200人ぐらいいた。その構成は、千葉航空工業学校、千葉県立高等女学校、千葉市立高等女学校、安房高等女学校家政部の生徒であった。安房の女生徒は寮生活であったろう。戦闘機の座席周りとは、風防ガラス、椅子等の鉄鋸打ちを手作業で行った。外部はジュラルミンである。材料がなくなると、ベニヤ板や木材が用いられた。ベニヤ板にやすりをかけるのは滑稽であった。鋸は焼きを入れて使った。この作業に給与は支払われなかったが、昼食は出された。給食は芋のサイコロ煮で米粒が芋をつなぐ程度であった。おかずは、スケソウダラやニシンが出た。

1945年春、艦載機グラマンヘルキャットが工場に飛来し、機銃掃射を浴びた。このとき、市立高女の板倉さんが臀部に貫通銃創の重傷を負ったが、死者は出なかった。この時のグラマン機は風防ガラスを開けて、超低空で襲って来たから、搭乗員の顔がはっきり見えた。工場には応戦する態勢や火器がなかった。葉莢に当たる生徒もいた。米軍機の一部には、アジア人蔑視の態度があったと思う。戦後、数日たった千葉市佐倉街道で牛車が国際法違反で気まぐれの機銃掃射を受けて、逃げられない牛が犠牲になる事件もあった。

1945年6月10日8時4分ごろ、私は、工場に出勤する途中で、院内小学校の角に来た時、B29の爆音と共に地響きがして、千葉市新宿方面に白い土煙が、首をあげなければ先端が見えない程高く上った。これは、千葉高女へ投下された爆弾だと思われるが、当時は出勤を急いでいたので、後続の鉄道機関区や女子師範学校への爆撃は確認していない。日立航空機は朝の爆撃が住宅地に逸れた



破片で人を殺傷する爆弾の名称
殺傷爆弾
破片集束弾
米軍では(日本の)消防団員殺傷用にと

たので被害はなく、平常時で作業が行われていたと思う。このあたりの記憶は定かでない。この頃、日本軍はサイパン島、テニアン島で陥落し、米軍はB29による渡洋攻撃が可能になっていた。

7月6日の空襲では、千葉市貝塚町の千葉刑務所の裏に

張り付けになった死体」、「防空壕内一家全滅の悲劇、各町内に」、「新聞に載らない陸軍高官、料亭並木の防空壕で焼死」の記述がある。

空襲戦災者数についても、独自の見解を持っておられる。空襲直後は戦災者数「2400人以上」から「1500人」に、現在、千葉市は890人を公式数字にしているが、空襲戦災者数は、戦時下では戦意高揚の陰で過小評価され、米軍占領下でも過小評価されていると主張されている。

日本軍による南京・重慶に対する渡洋無差別爆撃にも関心を示され、研究されている。一方、絵が上手で紙芝居なども制作され、学校生徒たちに戦争と空襲の語り部として平和教育活動をされている。書も上手で日中書道史も研究され、中国とも交流されている。これまでの調査研究成果を本にまとめることも検討中である。大人と子ども向けの戦争と平和の学習会の講師として適任である。講義メモに「惨状を伝えるには、次世代には証言集しかない。フィルムには残せなかった。語り部は命ある限り。松本貞雄先生には感謝」とある。みなさんから是非、講師派遣の要請をして下さい。高橋さんは、現役の税理士でもある。

(編集委員注)軍人勅諭 (抜粋)

我國の軍隊は世々天皇の統率し給ふ所にぞある。... 大勇にはあれされは武勇を尚ふものは常々人に接(はじは)るには温和を第一とし諸人の愛敬を得むと心掛けよ由なき勇を好みて猛威を振ひたらば、果は世人も忌嫌ひて豺狼(さいろう)などの如く思ひなむ。Wikipedia

(編集委員注)戦陣訓 (抜粋と解説)

「恥を知る者は強し。常に郷党(きょうとう)家門の面目を思ひ、愈々(いよいよ)奮励(ふんれい)してその期待に答ふべし、生きて虜囚(りょしゅう)の辱(はずかしめ)を受けず、死して罪過の汚名を残すこと勿(なか)れ」は有名である。

「当時、中国戦線では戦況が膠着状態に入ったことにより、兵士の士気は落ち、放火、略奪、婦女暴行といった不祥事が度重なるようになっていた。軍紀建て直しの必要性を感じた陸軍は、「焼くな」「盗むな」「殺すな」の「三戒」を徹底させ、規律ある軍人となるような方法を模索していた。ただ、「犯すな」といった「強姦してはならない」などという表現は、とても勅語に書けないため、勅語ではなく別の形式、すなわち戦陣訓という形で発布することとした」とある。Wikipedia 戦陣訓より

齋藤哲子さん証言（13歳、高等女学校2年生、千葉県長生郡）

私の家族構成は、父母、姉一人、私、弟2人の6人家族である。家族は千葉県長生郡東浪見の母の実家に疎開していた。戦争が激化するまでは、家族は横浜市中区麦田町に住んでいた。父は、すでに1943年から海軍軍属としてジャワ島に船舶サルベージに従事していた。父は、横浜にいるころから、沈没船の引き揚げの仕事であり、出張が多く、私は、父が少しでも長く家にいると「いつまでいるの？」と心ににもないことを父に言っていた。5歳年上の姉は、千葉高等女学校を卒業して、軍需工場で勤労奉仕をさせられていた。千葉市の日立航空機だと思われる。私は、長生高等女学校2年生であった。長生高等女学校は、1年生まで勉強をしたが、2年生になると勤労奉仕の毎日になった。主として食料増産の仕事であった。先ず、出征兵士の農家を助けた。草取り、稲刈り、新たな土地の開墾、学校が管理している農場での田植え、草刈りであった。私たちは、稲刈りしても米を食べたことはなかった。「誰が食べているのか」と話合った。1941年12月8日の真珠湾攻撃のニュースは「大本営発表、陸海軍は本日未明、米英と戦闘状態に入れり」と伝えた。

授業中、空襲になった時は、裏山の松林に逃げた。空襲の目標は茂原の飛行場であった。米軍機が爆弾を投下していた。艦載機も低空で飛来して、機銃掃射を浴びせた。しかし、村人には機銃を向けなかった。B29が通過する時も、空襲警報になるが、村に爆弾は投下しなかった。1943年頃、日本軍は風船爆弾を製作して、一宮海岸から、夜間放球しはじめた。夕刻になると九十九里海岸の松林に隠していた風船爆弾を放した。初めは、ガバッと飛び出し、その後、ゆらゆらと上昇していった。大きさは畳2枚ぐらいで色は自然系であった。そのために付近を走る国鉄房総東線の列車の車掌は付近通過時にブラインドを下ろすように乗客に告げた。1日に1個か2個放していたようだ。聞くと、アメリカ本土に到着した風船爆弾は少ない。

また、敗戦濃くなると、鉄資材が不足して来たので、軍部は九十九里海岸から砂鉄を取ろうと考えて実施した。海岸に掘立小屋が建てられて、母は近所の主婦らと共に動員されて、太東岬付近の黒い鉄を採取させられた。ここで、どれだけの鉄がとれたかは疑問である。

疎開先の東浪見村立国民小学校6年生の時、軍馬に与えると言う説明で、夏休みを利用して、牧草を刈り、庭で乾燥させて学校に届ける指導があった。また生のサツマイモを細く切り、乾燥させて供出したが、目的はわからない。

終戦間近になると、村の丘に兵隊が駐屯して来た。米軍の九十九里上陸を想定した作戦であったと思う。兵隊は「蛸壺（たこつぼ）」作戦と言っていた。米軍の上陸を阻止するために、蛸壺にひそんでいる兵隊が爆薬を抱えて体当たり

するのである。この演習が実施されると、有名なイワシの地引網が禁止され、漁民も困った。しかも、兵隊たちは、決して若くなく、履物は藁草履であり、腰に予備の藁草履を挟んでいた。精悍な兵隊は居なかった。

同じ兵隊かどうか知らないが、村に駐屯している兵隊は空腹であるらしく、村の民家に来ては「なにか食べるものを下さい」と訴えていた。母も、近所の人もなけなしの米でおにぎりを作って兵隊に与えた。村人は、出征している家族の苦労を思い出したのである。しかし、食料もない軍隊であった。

終戦直前になると、九十九里の小高い丘からは、沖に夜間煌々と照明し停泊している米軍艦船が見えた。村人は、敵を間近に見て不安が募った。ここから艦載機が低空で飛来して来た。

1945年3月10日の東京大空襲の火災で巻き揚げられた紙幣の焼けた破片等が、九十九里まで飛んできた。この日は、千葉県銚子市も空襲を受けている。

1945年8月15日の終戦放送は聞いていない。まわりの大人から戦争が終わったことを知らされた。その日の空は青かったことをはっきり覚えている。私は、特段、敗戦を悲しく思わなかった。この日を契機に、艦載機は飛来せず、夜間も灯火管制から解放され、戦争が終わったことを実感した。

しかし、食料不足はひどくなった。疎開先に農家をひとあたりすると、母は遠くまで買い出し出かけた。悔しかったのは、私の一張羅の洋服が近所の子どもに渡り、それが普段着として着られていたことである。母は、和服の帯の下に買い出しの米を隠して来たが、千葉駅で警官に没収されたことを悔やんでいた。防風林の内側で土地を借りて、カボチャとサツマイモを栽培し、食料にした。

1946年8月父が突然帰国した。父は、外地にいた時もこまめに軍事郵便で家族に連絡をしていた。しかし、今回は電報も打つことができなかつたようである。父の帰国をもっとも喜んだのは母だと思う。子どもたちは国民服でゲートル姿の疲れた父を見て、飛びつかなかつた。帰国しても、すぐにサルベージの仕事はなかつた。さらに、千葉市空襲で焼け出された母の兄家族が疎開して来たので、私たち家族は長生郡一宮町に中古の家を見つけて引っ越した。私たちの家族、親族で戦死者は出なかつたが、このことは珍しいことである。戦後の女学校の教科書は民主主義に反する考えの部分の墨ぬりから始まった。修身の授業はなくなった。高女入学時の英語は、**This is a pen.** 程度であつたが、戦後の新しい英語の先生は、流暢な英語で話しかけたので、英語教育の落差にたじろいだ。私は、学制改革で、長生第2高等学校に編入した。卒業後、私は千葉大学教育学部2年制課程に入学した。その後、中学校の教師となった。私は、混乱の社会背景のもとで自分勝手な子どもを作らないと決めた。子どもたちは、私の体より大きいのもいたが、素直であつた。生徒会活動も活発になり、本当

の自由を体験したと思う、姉は擁護教員養成所をでて、教師になった。家が貧しいので、私は、奨学金を貰って勉強した。姉は、授業料が免除された。

父は、結局、日本の戦争賠償が行われるときに活躍できた。フィリピンの賠償として、マニラ湾に沈んでいた船を引き揚げる所ごとに着いた。

戦争は無意味である。問題は武力で解決できるものではない。

(編集委員注)

齋藤哲子さんは少女時代を振り返って、短歌を作られています。いくつかを紹介합니다。

<ピストルを枕に隠し上海の 事変の最中に吾を生みし母>

これは齋藤さんが、日中戦争の年 1937 年 2 月に上海の租界地で誕生した様子を描いている。(以上、齋藤哲子著「花とヒマラヤ第 1 歌集」2002 年発行より)

<紺の制服>

シンガポールサイパンガムガダルカナル 侵攻のたび 地図に旗立つ

南京陥落の裏に虐殺ありしこと 知らず浮かれて提灯行列

小旗振り出征兵士の賑わいにのなか 少女期のわれも

をなご先生従軍看護婦と征きませり 紺の制服凜々しと仰ぐ

きりぎりすとふあだ名の担任に 赤紙来別れを告ぐる喉仏震ふ

<遊就館>

東條英機は法務死とあり 戦死者の眼に囲まれ恥じることなし

戦争肯定の展示満ちたる遊就館 軍国少女たりしわれは悲しも

(以上、齋藤哲子著「花とヒマラヤ第 2 歌集」2009 年発行より)

本木淑子さん証言 (15 歳、高等女学校 4 年生、千葉市東本町 37)

私の家族構成は、父母と姉、兄、私、弟 2 人の 7 人家族であった。父の職業は軍人であった。父は、1942 年に満州に派遣され、大連、奉天、新京 (長春) を転任とした。終戦時、陸軍大佐であった父は、終戦直後の混乱の中で、何者かに殺害されたらしく、生きて帰国できなかつた。父の死亡公報も我が家に届いたのは 1958 年であった。死亡確認が容易でないことを物語っている。

姉は、私と同じ千葉高女をすでに卒業して、千葉県庁に勤めていた。兄は、茨城県の多賀高等専門学校の学生であったが、勤労働員はなかつた。弟たちは、千葉中学校と本町小学校に通っていた。私は、千葉高女時代、英語は敵性語だからということで英語の授業が出来ないくらい追いつめられていた。私は、This

is a pen. 位の英語を覚えたが、一方、英語の物語を先生が読んで聞かせる授業もあった。3年生になると、授業はなくなり、毎日、日立航空機の軍需工場に通った。工場では昼食の給食があった。

1945年7月6日の朝、下の弟が愛知県北設楽郡池場の叔母の家に縁故疎開するために兄と姉に連れられて出発する日であった。

その日の夜10時ごろ、空襲警報になり、いわゆる七夕空襲が始まった。母は私と弟を連れて逃げた。家にも、防空壕があり、10人位で入っていたが、自警団がメガホンで「広場に逃げろ！」と叫ぶ誘導に従い、広場に出た。大規模な空襲を初めて見た。照明弾が炸裂しゆらゆら落ちてくると真昼のように明るくなり、私は恐ろしさを忘れて、まるで映画のロケの様だと思った。しかし、すぐ焼夷弾と爆弾が落下して来て戦場になった。私たち3人家族は頭を一緒に並べ、足を延ばすと3角形の形で伏せていた。母が右に、左に私が伏せ、弟を中央に伏せさせた。爆弾が至近距離で炸裂した時、私は左足大腿部を熱い丸太で思いっきり打たれたような激痛を感じた。気がついて、弟に声をかけ、体をゆすったが、もう身動きしなかった。頭部に爆弾の破片を受けたらしく、即死であった。母の左足の甲を爆弾破片がえぐったらしく、ピンポン玉の大きさの肉が盛り上がっており、出血していた。母は重傷であった。私は、持っていた三角巾で母の足を大腿部で止血した。ここは危ないと思い、私も這いながら母を背って安全な場所と思われる田圃の方へ避難した。やがて、梅雨の末期の様な凄惨な雨が降ってきて、火災を鎮火させていった。夜が明けると、近所の警察官である大和久さんが私たちを発見し、リヤカーを持ってきて、母を千葉大学医学部病院へ運んでくれた。千葉大学病院は大勢の負傷者でごった返していた。担架のままの人、うずくまる人、泣いている人、唸っている人が居る中を看護婦が走っていた。医者（N助教授）は、患部を診て、この儘でおいても足首から下は機能できないと考えられるから、すぐ左足首を切断すると告げ、手術した。しかし、翌日、ガス壊疽に感染し、患部が発熱した。患部は押すとへこむような状態であった。私は、水タオルで冷やしたが、熱は下がらず、ついに医者は、ガス壊疽感染のためと思われるから、大腿部から切断すると告げた。母は、手術の苦しさで既に弟（息子）を死なせたショックで、「手術は要らない。私を息子の所へ行かせて欲しい」と泣いて訴えた。私と愛知から戻った兄は、母親にまで死なれてはと「おかあさん、生きてください、手術を受けて下さい」と泣いて訴えた。医者は、双方を見て、母に「おかあさん、子どもたちの願いを聞いてください」と母を諭した。この手術は、傷口を安易に縫合するとまた、感染の恐れがあるので、傷口を開けたまま治療する方法であった。医者は「今夜が山場だ」と告げたが、母は生きた。母が入院中は、夜間私と母は手首を紐でつなぎ、私はベッドの下で寝た。入院中も空襲警報が発令されるたびに、上

下の歯が合わなかった。

私たちの願いが叶い、10月には退院できた。入院中、私たちの窮状をみて近所の人たちや友人が食事や食料の差し入れをしてくれた。嬉しかった。私たちの苦しさにもかかわらず、私は苦しさにおいて「不公平感」を持たなかった。せいぜい、これからお国のために尽くすべき弟がなぜ先に死ぬのかと疑問を持ったぐらいであった。姉もかつて、宮城（きゅうじょう）に行くと言っていると自然に頭が垂れたと言っていた。母の入院中は、私の足の怪我を治療するゆとりがなかった。私の足に爆弾の破片が食い込んで入っているらしいが、医者には体中を巡るだろうと言いながら、検査も手術もしなかった。この空襲で、公式な死亡診断書、母と私の負傷診断書（証明書）は発行されていない。

私たちは母を連れて、弟と姉が疎開していた、愛知県北設楽郡池場（飯田線長岡駅下車）に移住した。1945年終戦の年である。その前後に大きな問題が起こった。姉は、千葉県庁を退職し、池場村役場に勤めていた。その村長から姉は、「息子と結婚してくれないか」と強く求められた。私たちは、戦後の疎開が終われば千葉に戻ることにしていたからである。もっとも悩んだのは当の姉である。親戚からもよい縁談だから受けるよう説得された。農家はしないと云う「条件」で結婚したが、農家もやり9人の義弟、妹の世話、自身の二人の子どもの世話、主人の経営する旅館の女将を勤め、主人が県会議員になり、政治家夫人にもなった。又、大姑、舅、姑の看取りもした。戦災で死んだ弟は千葉中学校の2年生で、手が器用で工作が得意であったから、将来は理工系に進んだに違いない。疎開で生き延びた弟は豊橋中学校から、東京写真大学に進んだ。母は、左足を失うなど重苦を負ったが、元気を取り戻し、疎開地では、弟が遠い中学校に通うために、朝4時半に起きて弁当を持たせた。手術患部がきちんと縫合されていないために、とうとう義足は付けられなかった。毎年、1日か2日は、傷の痛みで七転八倒の苦しい時を持った。母は、82歳まで生存したが、70代は弱気を見せなかった。

私は、人の紹介で東京医科歯科大学の図書館に採用されたので生活が安定した。司書の資格をとり、英仏独語の書物を分類するために外国語の勉強を始めた。3人の男子が大きくなるまでは、母親として子どもに尽くした。

私は、戦後キリスト教の洗礼を受けた。2008年3月西千葉教会の木下牧師から“戦争体験を聞きたいと言う方がいらっしゃる”とのことで、市川まり子（ちば・戦争体験を伝える会）さんにお目にかかった。その折、私の母・貞枝の手記「孫への手紙」を目にした。私宛てではなく、弟の息子、学君が中学生の時、学校で祖父母に戦争の話を聞いてくるように課題が出されて、母が学君に送ったものである。この手紙には、「近所の方も其の時13人死なれた」と記されている。メンバーのお一人である石野稔子さんが小さな美しい冊子に手作りして

くださったものだった。母の筆跡を見つけて読むうち、涙かこぼれた。2008年7月7日、千葉NHK-FMの番組「千葉まるまる60分」の中で、たなばた（七夕）空襲についてのインタビューに答える形で登場し、話をさせてもらった。ラジオを聞いた何人かの人から反響があった。

紙芝居は、市川まり子さんから勧められた。体験をもとにした紙芝居に挑戦してみたが、生まれて初めてのことであり、稚拙で恥ずかしかった。「上手、下手の問題でなく、体験者の自作・自演に意味がある」と説得を受け、今迄に、三つの小学校、千葉市生涯学習センター、千葉市民活動センターなどで活動している。戦争を知らない方たちに少しでも実態が分かってもらえると嬉しい。

今回、証言をする時に、父が職業軍人であったことを言いたくなかった。中国満州で日本軍による占領、支配の根拠が不当で、支配の仕方が非人道的であったことを学ぶにつけ、父が属した日本軍が犯した戦争の罪を感じるからである。しかし、父は、中国軍の捕虜になる前に死亡したと言われている。聞くところによると、父は大変な子煩悩で毎日のように軍事郵便を内地に送っている（これらは、全て空襲で焼けた）。実際、千葉空襲での弟の死、母と私の負傷を伝える手紙を見た父はすぐに励ましの返事を書いている。父の希望は、軍人でなく画家であつたらしい。祖父が、子どものうち一人ぐらいは軍人にしたいと望み、説得されたから、軍人になったと言う。戦争が人間の運命を変えたのである。父と弟が若くして、幼くして命を奪われたことを悲しく思う。

子どもが、成人してから、勉強をしようと言う気持ちが強くなった。英語は水道橋にあったELEC英語研修所で勉強し、卒業後は東京・小岩で幼年・小学生の英語教育を担当させてもらった。調理師学校にも通った。放送大学で、「人間の探求」と「社会と福祉」を専攻し、それぞれ卒業した。舅・姑を看送り、奉仕させていただいた民生委員を辞したのをきっかけに、71歳で、神田外国語大学の大学院生として言語学を学ぶ機会を与えられた。これは日本だからできたのではないかと考える。中国では、学ぶ時、年齢制限があつて、高齢になると勉強する機会が与えられないとの事である。又、たまたま放送大学が近くに存ったこと、放送大学は年齢制限も入学試験もない。単位をこつこつ取って行く事により、資格が与えられる。神田外国語大学の場合も年齢が高くても現役の受験生と全く同じ様に受験の資格を与えていただけて、他大学の卒業生と共に受験することができた。考えてみると、戦争のため実際に全然、勉強が出来なかった期間は2-3年にすぎなかったかも知れない。しかし、私の場合、勉強と言うか学ぶことに対して飢餓状態が残ったと言う思いがある。世界各国では、戦争によってもっと若くしてその機会を奪われている人が大勢いるのではないかと思う。

今は日本語教師の資格を取得し、千葉市花園公民館で外国人（アメリカ、タ

イ、ベルギー、インド、インドネシア、フィリピン、スリランカ、中国、韓国
の国の方々の日本語教育のお手伝いのボランティアをしている。16年になる。

中国語を勉強していた2007年夏休みに、中国短期留学生募集（8月5日－26
日、長春）があり、年齢を気にしながら応募した。勉強の合間に「偽満州国新
京軍事顧問部」跡の建物を訪問することが出来た。私は、父が戦前この階段を
毎日上り下りしたのだと思い唇を噛んだ。

どんなことがあっても、戦争はあってほしくない。思想と教育の在り方は極
めて重要である。今の世の中も怖い時期にある。国民がよく知らないうち悪い
方向に進んでいる面があるのではないだろうか。君が代を歌わないだけで処分
される時代である。私が韓国光州で行われた朝日新聞主催の「韓国で考える韓
国の歴史と文化セミナー」に参加した時、空港に降り立った私たちに向かって、
ある韓国の老婦人が「日本人が今頃なんで来るのだ！」と怒鳴っていた。私た
ちは、もっと隣国のこと、世界のことを知らなければならないと思う。

（編集委員注）証言者は、大変な努力家である。父の文化的素養、母の頑張り
をそっくり継承されている。それでいて控えめなキリスト者である。

渡辺文江さん証言（4歳、千葉市本千葉町119）

私の家族構成は、父母と私の3人家族であった。父は、紅谷自動車でハイヤ
ーの運転手をしていた。父は、出征していない。叔父は、満州で時計商売をし
ていたが召集されていない。私は、当時まだ幼いので、記憶は少ない。

1945年の空襲は、7月6-7日の空襲から記憶がある。真夜中、空襲警報にな
り、母と私は一緒に逃げた。父は自警団の任務があるので、家族と一緒に避難
することは許されていなかった。母は、歩ける私を背中に背負って逃げた。私
が怖がらないように、はぐれないように母は考えたのだろう。母の背と防空頭
巾の隙間から、街を見ていた。母は、鉄道機関区の前で、海側へ逃げず、山の
手側に逃げた。母は、海に逃げると艦載機の機銃掃射から身を隠す物がないか
ら危ないと考えたのである。逃げる途中、線路際の2軒の家が炎上し、柱が焼
け落ちそうな光景を見た。何人かの女性は、疲れて避難できず、へたり込んで、
毛布をかぶって泣いていた。自警団の担当者がメガホンで「こっちだ！」と避
難民を誘導していた。母は、要町から祐光の田んぼへ避難した。やがて雨が降
って来た。大人は、焼夷弾は後ろに紐が付いていて、それが燃えながら「ヒュ
ル、ヒュル」と落下してくると言ったが、私は上空を見ずにいたから、焼夷弾
が水田に落下する時に発する「ビシー、ビシー」と言う音に聞こえた。

夜が明けて、家に戻ると木造平屋の家は焼失していた。父も戻って来た。家

族全員が無事であったことを喜んだ。この家は、父が大切に使ったので、大家が土地を売ってくれていたが、家屋はまだ借家だった。家にあったジャガイモの表面は黒焦げであったが、中は食べられた。

家がなくなったので、千葉市登戸の郡さん宅でお世話になった。その後、焼跡に広さは4畳半の大きさを焼けたタン屋根のバラックを建てた。内部は蓆を敷いた。窓はガラスがないので、タン板の押し上げ式窓であった。庭に井戸があったので、水は困らなかったが、電気はしばらく来なかった。しかし、父の自動車会社は焼けなかったので、父は自動車バッテリーを持ち込んで照明にしていた。近所の本千葉町は空襲で一帯を焼かれたが、大きな犠牲はなかった。規模の大きい空襲は、防空壕に入って蒸し焼きにならないように注意していたからである。

戦後、父は富士タクシーに転業し、私は千葉市立新宿小学校に入学した。学校給食で食べた食料品がアメリカの援助物資であったことは大人になって知った。新宿小学校は空襲で破壊・焼失した千葉高女の跡地にできた。私は、千葉高女が学制改革で千葉県立千葉第2高校を卒業した。高女から民主教育の男女共学の学校になったが、男子生徒が入学しないので、私が卒業すると千葉女子高校となった。私は、女子校も当たり前のように受け止めていたが、明治大学短期大学に入学した時は、男女学生がいて、よかったと思うようになった。また、この短大はお茶ノ水にあったので、通学も私にとっては、社会勉強になった。短大卒業後、大手建設会社に就職できたが、身分は雇員であった。女子社員は、大体雇員であったからそれが当たり前だと思っていた。しかし、この制度は、戦前の男尊女卑の考えを受け継ぐ雇用の男女差別だと知ったのは先の事だった。

私は、最近、市川まり子さんと知り合い、私の戦争体験を「ふみちゃんのちいさかったとき」と題する紙芝居を作った時、その結びの言葉は、「私の周りは、みんな生きてよかった」と言う感想であるが、戦争を再びしてはならない。私は、戦争に負けて民主主義になって良かったと思う。戦前の教育は偏向していた。生きるためにも戦争をしないためにも自由が必要であると思う。

春山信夫さん証言（15歳、中学校4年生、千葉市黒砂）

私の家族は父母、兄弟11人の大家族であったが、二人は赤ん坊の時に死亡している。家は農業である。父の時代は、今の千葉大学敷地にも広がる50町歩の農地を所有していた。私は、戸籍上は三男であるが、すぐ上の兄が赤ん坊の時に亡くなったから、事実上二男であった。父は、日露戦争の時、兵役に就い

ている。外地は行かず、近衛兵であった。兄、軍司は私より 9 歳年上であった。1941 年に甲種合格で佐倉第 57 連隊に召集され、通信隊歩兵として満州国河省孫呉に 3 年いた。其の後、上海からフィリピンのレイテ島に派遣されて、24 歳で「玉砕」している。兵長であった。兄の母屋を背景にした出征記念写真がある。兄の隣の軍人は塚田中佐で、千葉市黒砂在住で、出征兵士があるとそこに顔を出していた。

近くに加藤製作所は、空襲の標的になったが、1937 年に東京から移転し、戦車のキャタピラを製造する軍需工場だった。私は、関東中学校（現在、敬愛学園高等学校）の 4 年生であった。1-2 年の間は、授業もあり、数学も勉強した。英語は、**This is a book. This is a desk** 位は勉強した。軍事教練は、三八式銃の取り扱い、手旗信号等を教えられた。予科練出身の教官は精神バッターを使用した。4 年生になると、ほとんど勤労働員であった。私は、鉄道管理部、アルコール工場、木更津の飛行場建設、最後は国鉄稲毛変電所で働かされた。当時、中学校は 5 年制であったが、4 年で卒業する道もあった。

1945 年 6 月 10 日の爆弾空襲では、2 年下で東京から関東中学校へ転校して来た従兄弟の山本方巳が市原潤井戸から登校中、千葉機関区辺りで爆弾空襲を受け即死している。

1945 年 7 月 6 日、空襲警報が発令され、いったん解除になったが、再び空襲警報になり、夜 12 時前に空襲が始まった。千葉市の空襲よりやや遅れていた。千葉市中心地が炎に包まれているのを見て、次は私たちがやられると思った。黒砂地域では、B29 編隊は東京湾から侵入した。B29 は、富士山を目標に北上し、そこから東へ、東京湾を通過して飛来したと思われる。米機は、油脂焼夷弾と通常の焼夷弾の 2 種類を使用した。焼夷弾が落下する時、カラカラと言う音が聞こえた。この時間は、干潮で、北東の風であった。地元では陸から海へ吹く東風（こち）と言う風である。このため、黒砂地域では火災が奥地に拡大しなかった。しかし、乾燥していたのでひらめ川の水量が少なく、消火活動が困難だった。千葉市空襲を重く見て、県下から消防自動車千葉市に出動している。黒砂地域も空襲で火災になっていたのも、市川市から出動した消防自動車に黒砂の消火を頼んだが、願いは叶えられなかった。私の家の茅葺母屋に火がついたので、上って落とそうとしたが、炎上速度が速く消火を断念した。炎上する母屋の家財を持ち出し、板塀の倉の中の米や、モーターも外へ出した。

私は、上下 800 坪の農地の間の階段に避難した。夫が海軍に召集された姉が 6 月出産後、母子共に実家にいた。姉も含めて、家族もそれぞれの場所に避難したので、家族は全員無事だった。集落の人は、高台の畑に避難したので、無事だった。家屋は 14 軒焼失した。我が家の牛は、畑の電柱に繋いであったので、無事だった。ある農家では、牛小屋に焼夷弾が直撃し、牛一頭が死んだ。他の

農家では、類焼で牛が火傷し、1週間後に死んでいる。

1945年8月15日は、焼け残った農家で、10人位が集まり、終戦放送を聞いた。そこに集まった人たちは「戦争が終わってよかった」と言う安堵感で放送を迎えたようだ。私も、海軍兵学校に入学しようとしたけれど、空襲を体験した直後であったから、戦争が終わったことはよかった。関東中学校の3年先輩は終戦の前に、九州の知覧飛行場から特攻機に乗り帰って来なかった。

戦後、中央高専で技術を勉強したかったが、長男が戦死したので、私は農業を継がざるを得ず、進学を断念した。

この戦争は、よくなかったと思う。海軍と陸軍が正反対であった。我々の子どもや孫は、戦争が無いから幸せだと思う。

(伊藤章夫編集委員注) 千葉七夕空襲・黒砂地区の話

1945年7月7日、千葉市に空襲があった。この空襲は午前1時39分から3時5分までの攻撃で「七夕空襲」とも呼ばれている。この空襲で、千葉市稲毛区黒砂にも被害があったことは広く知られていない。千葉市の空襲罹災の資料(地図)にも罹災地区に入っていない。千葉市の資料によると、黒砂は空襲を受けなかった地区となる。

この空襲では、米機B29は、東京湾より黒砂上空を通り、穴川・轟にあった軍の施設である戦車学校・高射学校や加藤製作所(軍需工場)を狙ったものであると思われる。

黒砂も空襲の被害があったということは、千葉市黒砂に住んでおられる網岡壽江さんが知らせてくださった情報である。網岡さんの情報により、黒砂の空襲を記録された資料集が展示されている、稲毛区黒砂公民館を訪問した。

黒砂公民館で、黒砂の資料を保存する会(春山信夫氏代表)がまとめられた『黒砂いまむかし』全9冊の資料集を見ることができた。そして、その会で同名の絵本を出版された、増山良子さん(文)・山崎弘子さん(絵)を訪問した。お二人は、黒砂も七夕空襲の罹災地であることを、千葉市の空襲資料に採りあげるように働きかけていくと、意欲をみせておられた。

そもそも、なぜ「黒砂の資料を保存する会」が存在するのか。

会によれば、最大道幅52mの都市計画道路「新港横戸町線」が、黒砂の本村ともいえる「しゅく」を通ることが決まった。この都市計画道路の新設計画は1969年に決定したが、住民は、黒砂の「まち」を分断し、平将門の乱の落ち武者が住み着いたといわれる、宿通りが消えてしまうと「絶対反対」の運動を進めていた。

しかし、長い間棚上げ状態だった新港横戸町線新設工事が、2000年に着工された。この工事で消えてしまう黒砂本村(ほんそん)の歴史や、失われる様々なものを「記録」に残そうと、2002年に「黒砂の資料を保存する会」が発足し

た。同会は、黒砂の歴史や文化・産業や暮らし・地元の言葉や聞き書きなど、詳細に調査し記録しているが、一部に黒砂の空襲を調査発掘しているのである。これらの調査には、千葉大学文学部や千葉県中央博物館も協力しており、その水準は高い。

同会の調査によると、黒砂地区では、1945年7月7日の未明、B29の編隊に焼夷弾を投下され、茅葺き民家14軒が焼失するか大部分が焼けて、牛2頭が死んでいる。幸い人には被害がなかった。当日は、土地の言葉でいう、東風風（こちかぜ）が強く、焼夷弾は民家集落の東に面している海に落ちたのである。千葉市の空襲資料でも、黒砂の海が「罹災地域」として記されている。

黒砂と現JR千葉駅（元鉄道機関区跡）の距離は約3kmである。焼夷弾攻撃は、東京大空襲・千葉空襲・銚子空襲などで見られるように、面的に広く火災が発生した場合は、多数の犠牲者を出している。

黒砂は、前述の陸軍戦車学校・高射学校や加藤製作所（軍需工場）が近くにあり、標的通りに焼夷弾が落下していたら、当然「火の海」と化していたかも知れない。

『黒砂いまむかし』の分冊中、空襲や戦争の記述がある部分は次のとおりである。参考にされたい。1冊の価格は1000円である。

『絵本・黒砂いまむかし』p40～p41 『黒砂いまむかしⅧ』p124～p178（第3章 戦争と黒砂） 『黒砂いまむかしⅦ』p44～p48（機銃掃射に2度ねらわれた）

高橋美佐子さん（旧姓・飯島）（当時県立千葉高女四年生・十五歳）p416-p423

一九四五年八月十五日、三百数十万人の国民の犠牲の下に、太平洋戦争は敗戦をもってその悲惨な暴挙の幕を閉じた。そしてこれに先立つ六月十日、千葉市は米空軍による本格的な爆撃を受けた。

当時私は千葉県立千葉高等女学校（現在の千葉県立千葉女子高等学校）四年生に在学していたが、約一年前より学徒動員で日立製作所の飛行機製造作業に従事し、学校工場に変わった木造の雨天体操場（通称控所）で働いていた。

六月十日はこの学校工場の公休日であった鯨、私たちの仕事である飛行機の計器盤は一定数量の達成が急がれていたために、公休日を返上して作業を続けるようにと、前日、伍長さんと称する日立製作所から派遣されていた現場指導員から突然申し渡しがあり、私たちのグループだけが臨時登校したのである。

私は朝食を終えて学校へ出かけようと玄関に出たとき、「千葉方面に警戒警報が発令されたから学校には行かないように」と茶の間からすすめる母の声を

背後に聞いて、私は下駄（当時は物資不足の為靴はなかった）を玄関から縁側に廻し、裏木戸からこっそり学校へ出かけた。

この時期の日本の情勢は、緒戦の輝やかしい戦果の華々しい光は消え失せて一九四二年のガダルカナルの戦闘以後、日本軍は敗退を続けアッツ島玉砕に引き続きサイパン島・硫黄島の玉砕の報が届き、本土決戦は沖縄本島において死闘（註Ⅰ）が展開されていたのである。本土への空襲は休むことなく毎晩くり返えされ、三月九日から十日にかけての東京下町一帯の焼夷弾爆撃（註Ⅱ）、五月二十四日から二十六日にかけての山の手への空襲によって日本の中心であった東京は殆ど焼土と化したのであった。この空襲によって兄一家は罹災し、その焼け跡から兄は軍医として応召されたのであった。

母の忠告をふりきって登校した私の行動は少しも特別なものではなかった。日毎に敗色の深まりゆく戦局を思えば、警戒警報くらいで家にいるなど思いも及ばなかったし、千葉市はまだ本格的な空襲を受けていなかったもので、安易な気持も働いていたのだと思う。

このようにして家を後にし、学校に着いた。家永嘉代子さん（現在升内さん）、川城秀子さん、平野慶子さんと私の四人が揃って、工具室になっていた本館の一教室に工具をとりに行った。工具箱を持って雨天体操場に戻ろうとした時、通りかかった化学のⅠ先生が、「いま、空襲警報が発令されたから気をつけなさいよ」と一言注意して下さったけれども、若い私たちの心にはその言葉は深く届かず、「ハイ」と元気よく返事をしたゞけで避難しようとは思わなかった。

雨天体操場の一隅、昇降口に一番近い所に私たちの仕事台があった。仕事を始めようとした時、突然市内の一角に起った今まで経験もしなかった「グオー」という、不気味な音と振動に、私たち四人は一瞬顔を見合せて、たゞごとではない事を直感した。防空壕への避難を申し合せて、各自が荷物を取りに行った。

家永さんは運動場にそった窓際へ、私は体操場の丁度中央部の仕事台に、川城さんと平野さんは私たちが仕事をしていた昇降口に最も近い仕事台に荷物を置いていた。それぞれの荷物の置き場所が一瞬後の四人の運命の明暗をわかとうとは、誰が予測し待たであろうか。私が荷物を肩にかけ防空頭巾を頭にかぶった瞬間であった。「グワーツ」と何とも形容し難いすさまじい轟音と圧力が体全体に押し迫った瞬間、私は両手で両眼両耳をしっかりと押えて仕事台と仕事台の間にパッと身を伏せた。それは、瞬間の出来事であった。真っ暗い宇宙空間に魂が放り出された感じで、今で言う「ブラック・ホール」に吸い込まれてゆくように意識を失ってしまった。

その後どれほどの時間が経過したのであろうか。自ずと正気づいて、うつ伏せていた上半身を静かに起してみた。身体の上にかかっていた瓦礫がザラザラと落ちる音が聞こえた。あとは無音の世界、シーンとして何の音も聞こえない。

目の前は真暗闇。廃墟の中に独り坐している感じであった。私は静かに手を上げて額に触れた。ぬるっとした手ざわり。暫く静かに座っていると、片隅から低く坤くように、「助けて」という声が聞こえたが、誰の声か判別がつかない。ぼんやり放心状態でいると、遠くの方から足音が聞こえてきた。

「誰かいるか」と怒鳴っている先生の声に、「助けて下さい」と叫んだ。

「おう、今行くぞ」という声に、「あ、安藤先生（図画の教師）だ」と思い、気が緩んだのかもう意識はなかった。

ふっと意識が戻った時、私は首から肩にかけてのはげしい痛みを覚えた。そこは本館の近くにある先生方が避難される防空壕の中だったようだ。一人の先生がズボンつりの紐を切って下さり、少し楽になって再び無冥の世界に陥込んでいった。

再び意識が戻った私の耳に長姉の涙ぐんだ呼び声が飛び込んで来た。

「会わせる家族がいたら会わせて下さい。お母さんと呼んだ方がいゝでしょう」という医師の声に、「ああ、これが死ぬということなのか」と心の中で思うと同時に意識を失っていった。

後で長姉から聞いた話によると、市内のある個人病院に一時収容されていたらしい。その後、千葉医大病院に移され、そこではげしい悪感に襲われて、「寒い、寒い」と言いながら、身体をガタガタ震わせていた。多量の出血による極度の貧血状態からの悪感であったらしい。私の怪我は、爆風によって飛んできた爆弾の破片が防空頭巾をつき破り、右後頭部の骨を砕いて視神経に衝撃を与えたことのようなのである。手術後、脳膜炎を起して助からないであろうという見通しであった。しかしその危機も去った後、失明が憂慮されたが、日を経るに従い、眼に光を感じ、やがて薄明の中に人の顔の動きを捉らえるようになった。それでも斜視になる心配が残っていたが、それも眼球の動きが左右普通になり、その心配も払拭されたのである。

その間に、傷口の化膿どめと称する静脈注射によるショック状態に陥り、全身チアノーゼと硬直を起すというハブニングがあった。又喉を通るものといえば日立製作所からお見舞に頂いたというグレープ・ジュースのみであった。又昼夜をわかたず首の周りを氷のうで冷やしていたが、その氷のうを取り替える時は首の神経がビリビリはげしく痛むのであった。私の怪我はもう一カ所あった。それは左足の下肢の筋肉がえぐりとられている所がある。私も全く気付かなかったが、着替えの時に発見された。ズボンの破損は全然なかったのだから、私が床にパッと伏せた時、空気の一部が真空になって肉がえぐられたのではないかと推測された。

このように負傷した当時最も重傷とみなされていた私が、「左眼視野狭搾症」という後遺症を残すのみで、外見から傷跡が分らない程に回復したのは、偏え

に主治医の先生と看護婦さん達の適切な治療と看護、学校の先生方及び級友達の祈りにも近い支えと、家族の献身的な看病のお蔭であると深い感謝を覚えるのである。

左限視野狭搾といっても、私の場合は左側の視野に縞状に見えない部分があり、そこに人でも物でも入ってしまうとその存在に全く気が付かないのである。又退院後数年間は過労・睡眠不足などによって、傷口が疼いたり、限の前が急に真晴になって、更に「ホシ」がチカチカ光る状態が起きた。このような時は眼を閉じて暫く静かにしていると元に戻ったものである。少しずつ眼がみえるようになって最初に私の眼に入ったのは、隣のベッドに横たわっていた老婦人の肩の傷口であった。ザクロのように口をあいて、そこにはウジがわいていた。薬品も包帯も不足していたのである。本当にお気の毒であった。

後で次姉から聞いた話では、私の負傷の知らせで駆けつけた千葉医大病院の廊下の両側は、爆弾で重傷を負った人々で埋まり、その惨状は目を蔽うばかりであったという。

私と同時に負傷した家永さんは、初めは軽傷という診断であった由だが、用心のために病院で一夜を越し、翌朝になって爆弾の破片が首の一部から食道を通して炎症を起していることが発見され、首と胃の手術まで受ける程の状態に陥ったのであった。

平野さんと川城さんの消息について尋ねても、母からははっきりした返事は得られなかった。しかし私共四人が、「関東信越地方軍需監理局長官」から表彰され、この表彰状と私たちの負傷が報道された新聞記事の切り抜きを母から示されて、その時にはじめて二人の友の死を知らされたのである。

川城さんは雨天体操場の太い梁の下敷になって即死、平野さんも建物の下敷になり、内臓破裂による内出血のため苦しみながら亡くなったという。川妹さんは老境に入ったご両親に愛されていた末娘であった。平野さんは一人娘。平野慶子さんの悲報に接してお母さんは一時半狂乱になったという。

川城秀子さんの物静かな聡明さと、平野慶子さんの明敏な頭脳と人を引きつける情熱的な弁論とを、私は忘れることができない。彼女は愛国者であった。理路整然と弁じたてる彼女の前に誰もが圧倒された。彼女は自分の信念にふさわしく、その若い生命を燃焼させて逝ったのであろうか。

母から二人の友の死を知らされて、私は愕然とした。二人の友が死んで何の表彰、何の名誉の負傷か。唯々虚しさだけが心の奥深くまで広がっていった。私は表彰状も切り抜きも一瞥したのみで横を向いて眼を閉じた。そんな私の気持を察して母は、二度と私の眼にふれぬようにした。敗戦後、処分したのであろうか、私の手許にそれらは残っていない。

七月六日の夜から七日の未明にかけて、千葉市は本格的な焼夷弾爆撃を受け

た。この夜は長い間の看護に疲れて母が帰り、長姉がその代りに私に付き添ってくれた。長姉は私より二歳年上であった。鉄筋四階建の病院の土台から、建物全体を揺り動かす程の猛爆、いつ自分のいる部屋が直撃されるか予測できない一刻一刻が死と向き合っている緊張感で、身体全体が凝縮してしまいそうであった。

空気を引き裂くような“ヒューン、ヒューン”という音は病室にまで響いてきた。軽症の息者達は地下室に避難した。私はベッドから起き上がることもできず、病床に伏したままはげしい爆撃の嵐の中にいた。長姉は後で述懐していたが、「あの時は、美佐ちゃんと一緒に死のうと思っていた」と。元来気丈な人ではあったが、母に代って私をかばってくれた心情には頭が下がるのである。

翌朝、空がしらみはじめた頃、次姉と隣家の人々が市中のくすぶりつゞける火煙の中を、私たちの安否をたずねて病室を訪れてくれた。母は昨夜の千葉市中の火災を遠くから見て、私たち二人の生存を諦めていたと次姉は語っていた。それ程に市中の火災はすさまじかったのである。母や長姉の留守がちな家を一人で守っていた次姉は、買いおきしてあった玉葱ばかりを、毎日、朝昼晩と食べて過していると話していたが、生来虚弱で痩せていた次姉は更に痩せ細って、千葉海岸からこの病院までよくも歩いて来られたことよと感心したが、家族の安否を気遣う一心だったのであろう。父亡き後の我家の姿の一面であった。

この空襲で最も痛ましい出来事は、沼田亀之助校長先生の殉職であった。先生の殉職の報を伺って、私共の負傷した責任を負って倒れられたのではないかという思いが迫って胸をつかれた。そして私たちの懐かしい学舎も、全焼の憂き目にあったのである。私たちの青春の思い出は形として残っているものは殆どない。唯々二人の友人の死が平和希求の祈りと絶対非戦の決意の礎として、私の心の中に刻まれている。彼女達の流した血が、決して無為に終ることがないためにも。(以下省略) 二九八〇年六月二十六日(手記)「太平洋戦争に生き残って」

註Ⅰ「ひめゆりの塔をめぐる人々の手記」著者 仲曾根政春 角川書店

註Ⅱ「東京が燃えた日」(戦争と中学生)著者 早乙女勝元 岩波書店

(2) 千葉市以外における国内での戦争体験(空襲、業務、疎開、戦争生活)(28人)

a. 県内(6人)

尾本ハルさん証言(17歳、農業従事、海上郡豊岡村)

私は旧姓多田ハルで、家族は農家の両親、兄弟・姉妹5人の7人家族であつ

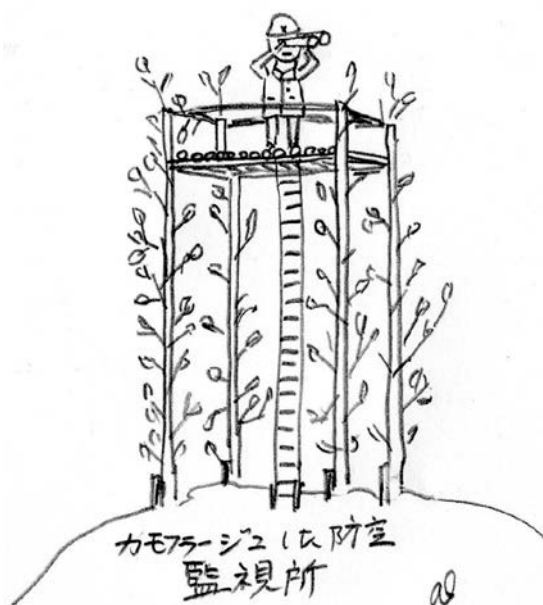
た。我が家は旧海上郡豊岡村八木にあった。この地区は起伏のある地形である。現在は銚子市であるが、豊岡村から銚子の中心地区まで、2里半（約10km）の距離であった。私は、豊岡村尋常小学校（学校には海拔55mの標識があった）を卒業して、農業を手伝っている。村から出征する人は、歓呼の声に送られて飯岡駅に車で運ばれるのが普通であった。その車には村民は「万歳！」をした。だから、幼い妹などは、自動車を見ると、見境なく「バンザイ！」をして笑われていた。戦争を継続するためには、家庭の鍋釜が供出され、寺院の梵鐘が供出されるようになった。村では、大きな声では言えなかったが、「こんなことをして、戦争に勝てるのか」と誰もが思っていた。お寺の鐘が、供出される時、村の人は「お寺の梵鐘が出征する。万歳、万歳！」と言って見送った。

1944年雪の日に、輸送船が撃沈されて近所の出征兵士4人が戦死したと言うニュースは村中を悲しませた。この船はフィリピンのレイテ島に向かっていたと言われている。

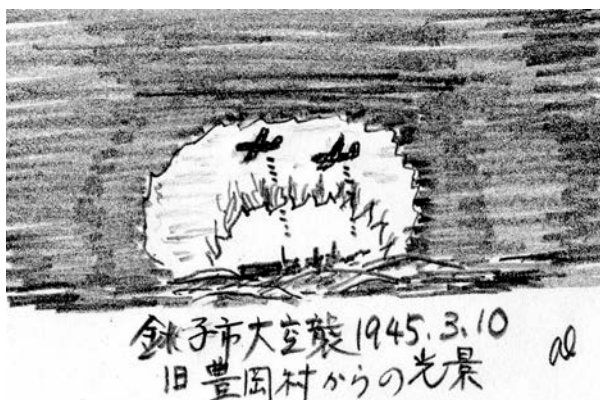
村の実家に近い場所に高射砲陣地があった。銚子の空襲のときに、この高射砲は応戦をしたのか見ていない。B29の3機編隊は、いつも上空を堂々と飛んでいた。私の実家の近くに高射砲部隊があった。この部隊は、風向・風速の調査をするために、高射砲から測定用の弾を打ち上げていた。測定弾は白い落下傘をつけてゆっくり落下していった。私は、落下傘が絹でできているために、追いかけたが拾うことはできなかった。

実家に近い街道沿いの場所に防空監視所があった。小高い岡の上に4本柱の櫓を立て、梯子を掛けて、上部に板を敷いた監視所である。屋根はなかった。監視所と高射砲陣地は約1kmの距離にあった。5-6人の兵隊が24時間体制の当番をしていた。監視所の近くに、軍の木造宿舎が用意されていた。この井戸は、私の家の深い井戸と共用であった。仙台から来た兵隊は「ヒコーキ」と言わず「ヒコーチ」と言っていた。兵隊の中には、戦後、地元の女性と結婚して住み着いた人もいた。

銚子大空襲は1945年3月10日夜、11時ごろ始まった。B29の編隊が銚子市を襲った。この日の空襲は豊岡村八木の農家3-4軒にも焼夷弾を落として行った。この空襲で警戒警報や空襲警報が発令されたか記憶がない。面的な空襲ではなかった。豊岡村の空襲については、当時「どこかの家で明かりを



漏らしていたから、その街道（現国道 126 号）沿いに焼夷弾が落とされたと言われていたが、真偽はわからない。焼夷弾で焼死する事件はなかったが、弟の友人の兄弟二人は、36本の焼夷弾を束ねている親爆弾が不発のまま、防空壕を命中し即死した事件があった。皮肉にも、犠牲者の親は銚子防空学校の職員であった。銚子大空襲は豊岡村から見ると、屏風が浦の向こうにある銚子の空が真っ赤であった。紙切れ等が、村まで飛来したが、火災の音は聞こえなかった。焼け爛れた紙は、7反歩の畑に降り注いでいた。この空襲については、いろんな話を聞いた。まず、銚子市笠上屋の乾物店の大きな防空壕で28人が蒸し焼きになった事件があった。銚子市清川では、馬を使つての運送業者の親子が、馬と共に犠牲になった事件もあった。空襲で大火災が発生すると旋風が起きた。豊岡村には艦載機による空襲はなかった。



1944年ごろより、軍隊が駐屯して、地形を利用した大きな防空壕が数多く造られた。30坪位のコンクリートの台座も造っていたが、全て軍の機密であり、国民にはその目的はわからなかった。時折、部落で防空演習があり、勤労奉仕にも駆り出された。我が家の割り当ては、私が出たが、手掘りでモ

ッコを後先二人で担いだ。現在では、想像をすることもできない。

兄に正衛がいる。この兄は終戦間際の1945年4月に召集され満州奉天の部隊に配属された。20歳であった。兄の書いた手記に基づいて話す。ソ連軍の侵攻に備え、敵に戦略的に重要な鞍山市の昭和製鋼所を渡すことはできないから破壊作業をしていた。そこで、終戦を迎えた。8月15日正午、重大放送を全将兵が広場に集合して聞いた。古参兵は「日本は無条件降伏だ」と告げた。これをどう受け止めていいのか、友とも語り、自問自答した。逃亡も考えたが、関東軍は単独でソ連軍の侵攻と戦うことになっていた。その後、ソ連軍は日本軍捕虜をシベリアへ拉致する情報が入り、総勢600人の部隊はソ連軍捕虜になることを避けるために移動した。しかし、敵はソ連軍だけでなく、中国共産党軍も敵であり、戦闘状態は続いた。ここで隊長は集団行動が危険だとし、個人行動を許可した。部隊は解散状態になり、兄は部隊の多数と反対の方向に逃げた。歩いてでも朝鮮にたどり着きたい、日本に帰りたい。そのためには安東をめざさなければならない。そこが千山であった。途中、冬を迎え、零下15度の寒さ・飢え・渇きに耐えられず、危険をとして中国寺院に入る。言葉は通じなかったが老僧に助けられ、またその後農民に助けられた。この時、話せた中国語はシ

エシエ（ありがとう）だけだった。ここで、親切な中国人に支えられて、やっと安全な生活を手に入れた。8ヶ月間そこで農民たちのために働いた。そこで中国語の辞書を見つけて中国語を勉強した。警察も村人の話と兄の態度を見て「好人」扱いにしてくれ、旅の便宜をはかってくれた遼陽警察局長と日本人居留民会長の話し合いで、兄は元日本軍人の籍は消滅し、日本市民になった。誠実な兄は中国人に惜しまれながら帰国した。兄は元日本軍人としてではなく、日本民間人として帰国した。これは兄をよくしてくれた中国人のおかげだと思う。中国胡盧島から出発した引揚船氷川丸は1946年10月12日に博多港に着いた。担架に担がれて帰国した。直ちに国立小倉病院に入院した。同年11月3日国立横須賀病院（不入斗）に転院した病院で兄と面会した。そのとき軍医は「あと1年もたない」と告げた。さらに、12月28日に旧千葉陸軍病院に転院して数ヶ月を過ごした。最後に千葉市の仁戸名療養所に入院した。会沢先生は兄の肺結核を診断し、1947年9月29日に肺切除の大手術を2回実施した。手術の前にお世話になった方々へ遺書をしたためた。手術の結果、命を取り留めたものの肋骨を8本ぐらい切断した。闘病の末やっと社会復帰をとげたのは1949年であった。病院内には患者自治組織の日患同盟が運動していた。兄は中国で何度も九死に一生を経験し、さらに帰国後も九死に一生を得た。兄は大勢の人から助けられた人生だと思う。兄の九死に一生を得た話は自ら「千山」と言う名の本にしてまとめている。その後、兄は松ヶ丘町日本池付近に傷痍軍人のための社会福祉法人アフタケア協会を作る運動を始めた。仁戸名療養所の岡田藤助所長先生が自宅を担保に融資を受けた。兄も国鉄から金を借りて造花のカーネーションを仕入れて販売し、利益を傷痍軍人の運動に投資した。また、川戸の仁守寺河内道賢住職が傷痍軍人の社会復帰に熱心で、法衣のまま県庁に座り込んだりした。最近まで、国立千葉東病院の売店にアフタケアのコーナーがあった。

1945年3月28日多田正衛が出征するので、鉄道省新小岩駅勤務時代の上司である長谷川治三郎さんが成東駅長であった。長谷川さんが兄のために赤飯を用意してくれた。その駅で終戦2日前の8月13日正午前に空襲と爆発事件が起きて、駅長ら職員が犠牲になったことは忌まわしい。事件は成東駅に入線していた弾薬積載の貨物列車に艦載機が襲いかかって、炎上している弾薬貨車の消火及び切り離しを試みた駅員9名を含む42名が弾薬爆発の犠牲になったのである。千葉県の駅に関する空襲ではもっとも大規模な事件（注）である。長谷川さんの墓は千葉市中央区の千葉寺にある。私は身内と同様にお墓参りをさせて頂いている。

戦争が終わっても帰国して来ない兄を家族は心配していた。ある日、近所の子どもたちが「こっくりさん」と言う占いをしていた。3本の棒の先端をくく

り、足を広げて回しながら占うのである。占いによれば生きていたと出た。また、父は兄のことをとてもかわいがっていたが、兄が1年生の記念に植えたミカンの木が1945年の秋には一粒の実をつけて色づいた光景を見て、父は兄の生還を確信していた。家族の願いが通じて、兄は家族のもとに生還した。

私の夫である尾本豊吉は1912年（大正元年）生まれである。夫は戦争の話は余りしなかったので、私も多くを語ることはできない。1933年、市川陸軍部隊（現在は和洋女子大学）で現役召集された。砲騎兵であった。馬上姿の写真が残っている。千葉寺の弟が水泳の国体選手だったから、夫も運動神経はよかったと思う。1944年1月に二度目の召集、仙台の東部部隊配属になり台湾からマニラに渡った。1945年7月迫撃砲の破片を膝に受け、動けなくなったところで捕虜となった。妻としては捕虜になったから生きて帰れてよかったと思う。終戦となってもモンテネルパの刑務所に収容された。夫は大工で器用だったので米兵のために何かを作ってやるとチョコレートをもらっていたらしい。1947年1月4日生還した。夫は戦地にいたのであるが、恩給支給は上に厚く下に薄い仕組みで公平ではなかった。夫は軍人恩給の申請はしなかったし、私も夫の死後申請はしなかった。フィリピン部隊の上官伊東晋元少尉は何度も編成し直された部隊の名簿を戦死・生存の区別をして作成し、1985年に私に家にも届けていただいた。夫は60歳前に、まわりの人から、南方ボケと言われるようになった。アルツハイマーと診断されたが、戦争のいやな思い出が病気の背景にあったと思う。イラク戦争帰還米兵にも精神障害や自殺者も出ていると報道されている。2007年7月に東条英機の孫娘東條由布子が「日本と祖父の名誉回復」のために参議院議員選挙に立候補（落選）したことがあるが、祖父が進めたアジア太平洋戦争で2000万人の犠牲が生まれたことを省みない暴挙である。

横浜空襲の火は九十九里海岸から見て午後の太陽を曇らせ、色も変わって見えた。戦後、千葉市に住んでから聞いた話は、①今住んでいる家は終戦が遅ければ、強制疎開（延焼を最小限に食い止める）のために壊される予定であった、②都川から南側地区は空襲が無かったといわれるが、長洲にも焼夷弾は落とされた、③空襲で子どもを背負って、出州方面に逃げた人が後ろを振り返ると子どもは死んでいた（機銃掃射らしい）、④空襲の後、大和橋近くの本町公園には死体の山が築かれていた、⑤県立図書館の近くの智光院でも死体が運ばれた、⑥当時、必ずしも全ての個人の家に防空壕があったわけではなかった。（共通の防空壕は千葉寺町（葛城3丁目のバス停付近）に設けられていた。）戦時中は2升の米を運ぶのに食糧品証明書が必要であったから、3里の道を往復したこともあった。

戦争は、家庭の大切な大黒柱を死なせるのだから、残された家族は悲惨である。戦争は、人間関係を歪めてしまう。戦争は絶対にしてはいけない。

(編集委員注)

千葉高校創立百年には「駅長ら 15 人将兵 27 人即死」とある。

(編集委員注)

尾本豊吉さんが千葉県出身の 28 人の兵隊と一緒に輸送船でマニラ湾に着いた時、米軍の爆撃で船は沈められ、尾本豊吉さん以外は戦死している。この本の別の証言者齋藤哲子さんの父君が戦後、その船を含めて引き揚げられている。証言者齋藤哲子さんのインタビューは尾本ハルさんの証言に登場する兄・多田正衛さんの妻・久子さんの家で行われた。

鈴木久子さん証言 (8 歳、小学校 3 年生、旧夷隅郡千町村荻原)

私は、終戦を疎開先の千葉県夷隅郡千町村(現在、夷隅市)で、後から疎開して来た母、弟と私の 3 人家族で迎えた。父は出征していた。疎開前、家族は東京都荒川区町屋で酒屋を営業していた。東京への空襲を心配して、学校は学童の疎開を開始した。クラスのほとんどの学童は長野県に集団疎開したらしい。私ともう 1 人の子どもは、縁故疎開を選んだ。私は、1945 年 2 月に、千葉県夷隅郡千町村荻原の父方の親戚を頼って疎開した。

私が疎開先で小さい空襲を体験した。ある日、山のほうから突然、艦載機が低空で頭上に現れた。視線が合うぐらいだった。優しい顔立ちであった。乗組員は 1 人で、金髪の長髪で飛行帽の上に風防眼鏡を上げていた。何故か、彼は私に発砲せず、海の方に飛んでいった。私は怖いという気持ちと、初めて見る米兵の姿に当惑を覚えた。日本兵は丸刈りなのに、米兵は長髪なのだ。当時、撃墜された米航空機の乗組員が不時着して山に隠れているから注意するように言われていた。近くの隧道の米兵は真っ赤な鬼の形相をしていたと言われている。母は夷隅郡で実際の機銃掃射を受けた。母が畑から帰る畦道で、突然「グリーン」という爆音とともに、機銃掃射を受けた。後ろから来た男子が母を土手の下に突き落とした。母は機銃の進行方向と 90 度違う方向にかわしたので助かった。命の恩人の名前すら聞くゆとりもなかった。東京大空襲の日は東京の空が真っ赤に染まっていた。夷隅郡まで紙幣の燃えかすや木片が飛来してきた。私が見たのは、夜間でなく昼だった。子どもだったから、夜間外出しないので東京空襲の夜景は見えない。

1945 年 8 月 15 日、重大放送があると聞いた 10 人ぐらいの村人が、県道に沿った夷隅郡千町村の伯母の自宅に集合した。当時、このあたりでラジオを持っている家は少なかった。天皇の放送が始まると、何を言っているのか分からない村人はラジオの方のにじり寄った。私は大人の背後で聞いたが、わからな

かった。そのうち、大人の背中が震えて泣いていることが分かった。母に聞くと、「戦争が終わったのよ」と答えた。私は、嬉しくなった。なぜなら、夜電灯を点けられるし、何と言っても大好きな父が帰ってくる。母は「戦争に負けたのよ」と言わなかった。

父は、1944年1月ごろ、出征した。召集令状は夷隅郡東村佐室の本家に届いた。父は、東京日暮里駅から佐倉連隊に向かった。女性たちが白いエプロンに国防婦人会のタスキをかけて父を送り出した。私は、日の丸の小旗を持たされた。父がどんな挨拶をしたか覚えていない。母は、私より6歳下の弟を負ぶって見送った。その後、母は、父が戦地に向かう前に日暮里駅を通過するという情報を得たので、苦労して入手した赤飯と腹巻と用意して父の列車の到着を待ったが、ついに来なかった。母はどんなに悔しかっただろう。日の丸で見送った日が父との最後の別れになった。父の本家に「赤紙」が届いた日に、皮肉にも私は3人のクラスメートと一緒に偶然にも東京の陸軍病院に慰問に出かけたのである。

父の出征後、東京都荒川区では、戦車が行動できる広い道（カイセイドウロと言っていた）が必要だという理由で、酒屋と住家の家屋が強制的に取り壊されてしまったので、家を失った母と弟も夷隅郡に疎開してきた。そして、また、3人の暮らしが始まった。

父方の親戚と言うことで母にとっては、大変厳しい日々を送ることになる。田舎では闖入者の疎開者に対する目は厳しかった。東京では普通の子どもが持っている革靴と雨カップを私も持っていたが、夷隅郡では、わら草履であった。雨の日に私が赤いカップを着て登校するとまた、私は「カップ」とあだ名をつけられていじめられた。言葉が違っていたこともいじめの原因になった。私はすぐに言葉を変えた。弟は、水田に頭から埋められた事件もあった。また、大人の世界も、米や野菜が盗まれたとか、盗んだ米の米粒が疎開者の家まで続いていた等の流言が流された。いじめは戦争が人をいがみ合うように仕向けた結果である。母は自立するために、親戚から1.8反歩の農地を借りた。この水田はザルで、水がすぐに抜けてしまった。家には一つしかないバケツを使って、川から田に水を送り込んだ。借りた鍬も刃が欠けていた。しかも、母は農家出身ではないので、一から勉強して、母と私の労働の甲斐あって、秋には6俵の収穫があった。家に米俵を積み上げていたら、弟が「これみんな僕んちのお米だよ」としんみり言って、母を泣かした。私と母は、戦中・戦後の食糧難の中で、朝ごはんとは弁当に米は使うが、夜は米を食べたことがなかった。夜は、スイトンであった。しかし、年下の弟は「ごはんが食べたい」と泣くので、弟だけは、夜もご飯であった。

父は、もともと胃腸が弱く軍務に向いていなかったが、叔父は満州国の憲兵

であり、別の叔父は 上級の軍人であった。二人が勲章をもらおうと、私と母が代理で受け取りに行った。戦後、母は援護局に何度も足を運び、父の消息を尋ねたが、情報が得られなかった。父がルソン島マニラで戦死したと言う公報は、戦後 3 年経った年によく届いた。私が 6 年生の年である。激戦地に動員された父は、家族に手紙を書くことも許されず、家族を思いながら死んでいったのだろう。白木の箱も届けられた。やっと、父の葬儀が行われた。これで父と決別しなければならない。そして、母は「おまえが大好きなお父さんは、立派に戦死したのだよ」と戦後を父親なしで生きなければならない私たちに誇りを持たせようとした。葬儀に参列した親戚の人たちが、白木の箱の中に何かあるのか見たいと言い出した。確かに、振るとコトコトと音がする。しかし、母は、「箱を開けないで下さい」ときっぱり言った。母は普段自分のことを主張したことのない女性であったから、この言葉は守られた。親戚の人たちは、箱の中身は、石ころだと想像していた。しかし、母は父の魂が入っていると信じ、箱を第 3 者に興味本位で開けられるのを耐えられなかったのであろう。当時、終戦になっても復員して来ない人は、投降をして現地人と結婚したのではないかと言う噂が流された。結局、その箱は開けられないままで、当時の習慣に従って土葬された。父の死亡が確定したことにより、父方にいる理由がなくなり、私達は、母が幼少時、祖父母と過ごした安房郡富浦町に母名義の家屋があったため、そこへ引っ越した。私が中学 1 年生を終了した 3 月であった。

戦後の生活は、国民みんなが貧困であったが、父親のいない家族には冷たい差別が加わった。母は育ちがよかったので、芸事に長けていたから、役場の職員相手にお茶とお花を教えてわずかな収入を得ていた。しかし、「花を眺めて腹はくつくなならない（腹がいっぱいにならない）」と陰口を言われていた。就職差別は私と弟を苦しめた。両親がいない家庭では、子どもが正しく育っていないと言う根拠のない憶測が支配していた。私は、中学を卒業したら、すぐに全寮制の看護学校に入学した。この看護の仕事は、一生の仕事となったので誇りを感じているが、看護学校でも私は差別された。

母は、長い間父方の田舎で気遣いや百姓仕事により体を壊し持病のリューマチの悪化や心臓病を患い、小学校の弟を親類に預け、入院することもたびたびあり、細々とした収入もなくなり、1 年ぐらい、生活保護を受けたこともあり、役場に行くのが私の役割で、役場の人への対応はやさしかったが、とても惨めな思いをした記憶がある。とにかく私は、自立をしなくてはと、高校入試が決まっていたが、入学費不要、2 年の学費が免除となる看護学校に入学したのである。母も町立保育所の調理師の資格を取って就職した。

私が父と一緒に過ごしたのは、少しの間だったけれど、考えると父の思い出がたくさん甦る。酒屋をしていたとき、母には配達に行くと言いながら、私を

自転車に乗せて浅草まで連れてくれた。ある日、私が家の前でシャボン玉遊びをしていた時、自転車が私に接触をしたのを見ていた父が、自転車の男を、有無を言わず殴りつけた。これは、暴力であるが、母は、この事件を通して父を頼もしく思ったが、父は私を溺愛していたと思う。また、正月は夷隅郡の田舎に連れてくれた。そして、「娘に飯を食わしてくれ」と言い残して一日中、川で釣りをしていた。

疎開先の小学校は荻原分教場で、先生は女先生二人であった。私の担任の先生は、乳児を連れてきていた。授業中は、成績が悪いような子に子守をさせた。私は家に帰って母に伝えると「まあ、なんてことを」と呆れていた。しかし、女先生の労働条件も悪かった。授業は算数と国語ぐらいであった。年に数回、儀式があるときは2里(8km)もある本校に通った。学校では、直立不動の姿で、君が代を歌わされた。また、ご真影(天皇の写真)を収めた奉安殿が設置されており、ここを通過する時は「ご真影に対して・・・奉ります」と声を掛け、最敬礼をするよう厳しく教えられた。ある日、友人を見舞いに行った帰りに、痴漢のような男が近づいてきたが、逃げるときも、村の神社の前では、やはり「武運長久を祈ります」と声かけなければならなかった。学校では、12月8日の開戦記念日と2月11日の紀元節には教室ごとに式があり、授業がなかった。紀元節はお饅頭も配られた。

私は、先生や学校は生徒に戦争が何であったのか、教育や学校は戦争に対してどんな態度をとったのか、きちんと説明を受けた覚えはない。驚いたことに戦後の女先生が教室で唱歌などは歌わず、いつも「勘太郎月夜」を「影や柳か、勘太郎か」と歌うのである。この歌のどこが大切なことかと疑問を感じていた。1947年、新憲法が公布された。夷隅郡では、憲法の本がすぐに届かなかったので、学校の孔版印刷で作製した。それから、まもなくして製本された憲法読本が届いた。

戦中、東京都荒川区に住んでいたころ、空襲に備えて父が防空壕を作っていた。空襲で焼かれないように母はその中に、貴重な品物を収納していた。戦後になって、落ち着いてから、母は元の家を訪ねた。ところが、そこは駐留軍のガソリンスタンドとして、床はコンクリートで固められていた。どうしようもなかった。東京の家から持ち出したの我が家の物は、バケツ1ヶ、卓袱台1脚であった。

私は、長い間、私の家は運がなく、戦争の被害を一身に受けていると思っていた。父の商売が中断され、家が壊され、父が戦死をした、戦後の苦しい生活を考えるとつくづく不幸な運命だと思ったのである。しかし、大人になって、労働組合に加入して、社会のしくみや歴史を学ぶ中で、私は被害者だけでも、日本はアジアで加害者でもあったことがわかった。それ以来、戦争の加害と被

害の両面を考えることができるように成長した。戦時中、荒川の河川敷に朝鮮人がバラックの家が住んでいた。土手に土筆を摘みに行くと朝鮮人部落が目に入った。日本人の子どもらは「チョウセン、チョウセン」と歌を歌うような調子で朝鮮人を蔑視していた。私も、その子どもと遊ばなかった。母は「そこへ、行っては行けない」と注意した。子どもが朝鮮人を差別するのは、大人の社会が差別するからだ。この差別思想が加害者の思想である。

戦争は絶対してはいけない。戦争に勝っても負けても、苦勞するのは一般の国民である。兵器を作る財閥は儲かるが、国民にいいことはなにもない。戦争被害を回復することはできず、残されたものは一生背負わなければならない。いかなる理由をつけても、戦争は絶対に起こしてはならないと声を大にして言いたい。

若い人には、目先のことだけに目を奪われず、社会や政治にもっと関心を持ってほしいと言いたい。

神作みつさん証言（9歳、国民学校3年生、旧千葉県香取郡小御門村）

終戦時、私の家族は父母、祖父母、子ども10人の大家族であった。家業は代々1町歩を耕作する小作農業であった。農家に養子に入った父は京成電鉄の車両整備の仕事に就いていた。私の上に3人の兄がいて、次いで長女の私がいて、下に4人の妹と一人の弟がいた。父は、40代で戦争には行かなかった。ただ、長兄は海軍予科練に志願したが、母親は猛反対した。その時、父は口を出さなかった。母は戦闘機に乗る予科練が戦死する確率を知って、農業を後継する長男を死なせたくなかったのである。私は、母の気持ちを理解しないで、予科練の7つボタンをカッコいいと憧れていた。部落の青年が茨城県霞ヶ浦の予科練に志願した時、歌を歌って見送りした。香取郡小御門村は後に下総町になり、成田市に合併されたが、当時は小さな部落であった。JR久住駅から歩いて〇分かかる田舎であった。私は、小御門国民学校3年生であった。学校まで片道4kmを歩いて通った。

国民学校1年生の国語では、戦時中であったので「ススメ ススメ ヘイタイ ススメ」であった。平和時には「サイタ サイタ サクラガ サイタ アカカテ シロカテ」となった。2、3年生の国語の内容は覚えていない。国民学校には年間を通じて、いろいろな儀式があった。4月29日の天長節（昭和天皇の誕生日）に母はおめでたい儀式だからと思って、私に長袖の着ものに袴を穿かせてくれた。学校に着くと、担任の女性先生が「こんな着物をなぜ着て来たのか、取り換えてきなさい」と命じた。やむなく片道4kmを家路に向かった。

母は、普段着に着替えさせても、不満があるらしく学校までついて来てくれた。教師は、不満げな母に向かって「戦時中ですよ」と諭した。2時間以上をかけて往復している間に式は終了していた。教師と母のやりとりを聞いて不思議なことだと思っていた。母は養蚕を営み、絹で子どもらの着物を用意しており、子どもらに手作りの着物を着せたかったのである。戦時中の形式主義であった。この教師は、いつも戦争の悲惨さを語らず、すべてお国のためだと言っていた。

よその部落の青年が出征した時、小学校前に全校生徒約300人が整列し、甲高い歌声が部落中に響いた。村の役員から「〇〇君、お国のために頑張ってください。万歳、万歳、万歳」と送られると青年は「〇〇、お国のために頑張ります。行って参ります」と答えた。私は、物陰で泣いている彼の母を見てしまった。彼女は頭に着けていた手拭いで顔を覆って声を殺して泣いていた。青年は結局帰ることはできなかった。青年の名前は、よその部落であったので知らない。いったん風が湧くと始末が大変だった。祖母は洗面器に風が付いた衣服を入れて、加熱した。祖母は風の佃煮だと笑った。

ある日、小学校に兵隊が50人ぐらい駐屯した。兵隊の中には、遊び半分のあんちゃん風のもいた。私は兵隊に「何しているのですか」と質問すると「穴を掘っているだけだよ」と回答したが、それが防空壕だとは説明しなかった。穴は10個ぐらい掘って、木材で壕を設置した後、兵隊たちはどこかへ行った。この壕は子どものためではなかった。実際、警戒警報、空襲警報になると裏山の林に逃げたからである。

学校は、生徒に対して、兵隊のご苦労に応えるために、ザリガニをとって御馳走しようと命令した。それから、授業は放棄され、バケツを持ってザリガニ捕獲作業になった。子どもたちの奮闘で、長持ち（家財をいれる大きな箱）にいっぱいザリガニが集められた。兵隊が食べたかどうか、また、兵隊が満足したかどうかはわからない。なぜなら、兵隊は子どもらにお礼を言わずに去っていったからである。ただ、兵隊が駐屯していた教室の腰板の隙間に風が動いていた。子どもらは、この風を衣服に付けて家に帰ったので、家にも風が湧いてきた。

ここでは警報は、小学校付近の高さ10mの火の見やぐらに取り付けてある半鐘を鳴らした。警戒警報はジャーン、ジャーン、ジャーンと長く打ち、空襲警報になるとジャン、ジャン、ジャンと短く連打した。

ある日、成田市磯部の利根川の河原に落下傘で脱出したアメリカ軍搭乗員の話聞いた。米軍機は、日本軍の高射砲で撃墜されたい。まわりの日本人は「竹槍で殺してしまえ」と叫ぶ者がいた。アメリカ兵は鬼畜米英で日本の敵であったからである。私はなぜ、殺さなければならないのだろうと疑問を感じた。また、別の話では、日本人女性が、米軍捕虜に対して、おなかが減っては

可哀そうだからと思って、おにぎりを与えたところ、その捕虜は食べなかった。日本人の評価は、アメリカ人はおにぎりを食べる習慣がないからと言う説とアメリカ人捕虜は毒が入っていると警戒した説があった。ここに二通りの日本人がいた。私は、アメリカ人を見たことがないので、現場に行ってみたかったが、やがて警察が捕虜を引き取った。私は、戦後も進駐軍兵士を見ていない。

戦争中、食料に困った人たちが、久住駅で汽車を降りて、部落（約 20 戸の農家）に毎日 20・30 人の買い出し部隊が来た。彼らは着物を持ってきて、芋、米、野菜と交換していった。私たちは買い出しの人たちを軽蔑はしなかった。物々交換でお互いに良いと考えていた。しかし、米は農家も政府に供出しなければならないので、農家でも芋を食べていた。私は、家で芋入りご飯を作るのが仕事であった。

1945 年 8 月 15 日の敗戦放送は家にラジオもなかったので聞いていない。母が「戦争は終わった。よかったね」と教えてくれた。父は仕事でいなかった。母は、平和になるが、アメリカ軍の上陸を恐れていた。私は、母に「戦争に負けた日本はなくなるの、アメリカ軍が日本を占領したら、日本はアメリカになるの、そしたら、私たちはアメリカ人になるの？」と連発の質問をした。これまでの経験では、台湾も朝鮮も日本の領土になっていた。

私たちの 14 人の大家族は全員無事であった。私たちの村は結局、空襲されなかった。長兄が戦死しなかったのは母のおかげである。

戦後、私たちの村に大勢の買い出し部隊が押し寄せた。列車はぎゅうぎゅう詰めであった。久住駅の近くのトンネルで、デッキにぶら下がっていた人が振り落とされた事件もあった。また、せつかく闇米（やみごめ、配給米以外の米は違法とされた）が成田駅、本千葉駅、千葉駅で警官の取り締まりがあつて、没収される人たちもいた。彼らは、車内で駅に警官が張り込んでいるという情報を聞いて、「あんやつらに米を没収されるなら、線路にばらまいた方がよい」と言って、実行した人もいると聞いた。当時は配給だけでは、生きていけなかった。

戦後の学校は田舎では民主化が遅れていた。戦時中、校長先生が儀式の時に、講堂の箱から恭しく教育勅語を取り出して読み上げていた。この前を通過する時は最敬礼をしていた。子どもの心は、箱の中に何があるのか、好奇心があつた。ある日、講堂の掃除があつた。私は、中を見るチャンスだと考えて、椅子を積み上げて、扉を開けて中を見ていると「こら！○○（私の旧姓）、何やっているか！」と兵隊上がりの教師に怒られた。私は「この中に何があるのか見たいのです」と返事した。私は、悪いことをしているとは思っていなかったのに、謝らなかつたら、教師は「このやろう、とんでもない奴だ。降りろ！」と激怒していた。降りてきて、ビンタを覚悟したが、その教師は「女は女らしくしろ」

と注意されて放免された。私は「女らしくとは何ですか」と食い下がろうと思ったが思いとどまった。これが男子なら許されることでもないからである。教師が母に連絡すると思っていたが、母に伝わらなかった。私も母に言わなかった。

4年生の時、国語の教科書の「天皇」の2文字は軍国主義だということで墨塗りされた。天皇が主語になっている文章で、主語が墨で塗られると文章にならない。私は教師に「これでは読めません」と素直に質問したのに、教師は「黙って読め、このやろう」と怒って、私の頭をゴツンと殴った。このI先生は、学校に復員した時「天皇陛下のために戦争に行って参りました」とあいさつしていた。まだ、独身で、転勤になる時、私に、家に遊びに来いと言ってくれた。その後、私が高校を卒業するまで手紙をくれた。

私の戦後はまだ終わらない。母は私を農家の嫁に出すことが、娘の幸せだと信じていた。私は、子どものころから和裁が好きで、小学校、中学校で金賞を取っていた。母も満足していた。高校生の頃、私は女性が職業を持つ時代だと言う自覚があったので、叔母が看護婦（中国戦線従軍看護婦）であったので、成田の日赤看護学校を受験して合格したが、母が反対した。次に、和裁の先生の勧めで、大妻和裁専門学校（現在大妻女子大学）を受験して合格したが、母がまたも反対した。専門学校を卒業すると、和裁の教師になる道が開ける。母は私を可愛がってくれたが、あくまで母の狭い世界の範囲でしか許されなかった。父は、「農家に嫁に行くな、私に町に出ろ」と言ってくれたが、母を説得しなかった。二つの専門学校受験には受験料、交通費がかかったが、和裁の泉光子先生が立て替えてくれた。この先生は、私を養女に貰ったかったようで父にも相談していたが、母には内緒になっていた。結局、二つの道は閉ざされてしまった。戦後の民主主義（職業選択に自由）は私のところまで届かなかった。

戦争は反対だが、そのためには教育が重要である。戦前の天皇中心の教育から人間中心の教育に変わったことはよかったと思う。しかし、機械的な平等主義はよくない。

長橋保さん証言（17歳、中学生4年生、勤労学徒動員、千葉市白旗）

一言でいえば、天皇の戦争で始まり、天皇の敗戦で終わるに尽きると思う。

<葬送の幼き思い>

私は、昭和4年（1929）神奈川県茅ヶ崎町で生まれ、同12年（1937）7月末（小学2年1学期）まで弟妹2人の長男として暮らした事になる。ご近所のカァチャンたちの井戸端お喋りが少しは判る様になった3、4歳の頃、[お召し

列車]がお通りになる、洗濯物は外へ干すな、マドや雨戸は開けるな、人糞は畑に撒くな、とサーベル（普段は親しくオマワリさん）が、おら（魚屋の女房）の家にも来たよ、天皇様がまた別荘に行くんだってよ、と [テン・ノオウ] 様とはどこの（だち）なんだ。この頃は遊び仲間（だち）と [ノオウ・テン] とか、.. [ノータ・リンス] とかと罵りあって日々ケンカ遊びをしていた。それと同じなのかな...「かーちゃん、テンチャンはマドの無い箱の中で何してんの」、「バカ、子供は黙ってな」と怒鳴った母親の顔は活動写真の化け猫の様に怖かった。日常茶飯事の成り行きだったのか、今は定かではない。

同じ頃、タクミおじさんが居た駅前自転車屋の家（同居）に近所の方が大勢で楽しそうにガヤガヤして、祭や正月の様で、おかずや赤い飯を一緒に食べた。

自転車屋には、もう一人のおじ（武志）さんが時々いたようだ。いつのまにか、このおじさんも帰ってこなくなった。大工太郎爺の家は、遊ぶ所（庭）が大きく、畑もあった。すぐ前を、汽車ポッポが朝から夜まで走っていた。そんなこんなで、いつものありきたりお遊びの毎日が続いていた。赤トンボがいなくなった頃、爺の家にもいつもと違う人が大勢来る様になったが、とっても静かである。鈴の音がときどき鳴り、ブツブツ唸り声が聞こえる。出て来る人は顔に何かあてて元気なく帰って行った。暗くなって家に入ると煙がでていた、奥の方に蠟燭（ロウソク）が二つ光っている。翌朝、爺とトーカーちゃん 3人が学校へ行くよ、まってなよと出て行った。今日は、お昼のサイレンが鳴らないのかな。遠くから 祭の鉦（かね）やデデンタイコやうなり声がしてきた。大きい道（新町通り）のこっちと、むこうに駅の方まで大勢の人が立っている。とがった帽子をかぶり光った着物をたらしめた人が 5 人ぐらい、ブツブツ唸り、大勢の人が付いて行く、何も喋らず、おとなしい、ザワザワ歩く音がする。今度は、みんな黒い物を着て居た。後から後から同じような人が来て、なかなか終わらない。

七十七年（昭和 7 年）前の忘れ得ぬ、見たり聞いたりした思い出である。

物忘れ（痴呆）が相当ひどくなった母親キク（1986 年（昭和 61 年没）享年 82 歳）の思い出と自慢話をよく聞かされていた。そんな一つ、二つ、鍛冶職人の父親は、北は、樺太、南は台湾、日本全国各地を渡り歩き金属加工の技を身につけて、駅海岸側の町工場で旋盤を回して居た。そこで母親は知り会ったそうである。おらの父ちゃん腕がよく、貰う金は、人口 2 万足らずの町長月収 40 円の 3 倍がご自慢であった。今にして振り返って思えば、駅前から三つの島（左は江ノ島、遠く烏帽子岩、よく泳で行った平島）が見える外洋の渚（約一キロ）までの砂丘の庭、宮大工太郎爺作、高貴の方、成り金の別荘、拳闘選手 [ピストン堀口] 天井から太く長い袋がブラブラしていた練習所、おじさんの自転車店、皇室献上和菓子店、朝早く湯気を立て、餅をつく釜成屋（現存）、忘れぬ

町、茅ヶ崎駅界隈である。

<小学校入学と転校>

私は、2月11日の早生まれ、1935年（昭和10年）4月に町立茅ヶ崎尋常小学校に入学することになる。カーチャン（この頃はまだ）から、タモ（保の呼び名）、先生に（ナガハシ）と呼ばれたら（ハイ）と返事すんだよと、毎日怒鳴られ、家を出た。

学校では仲間（ダチ）も増え、又とない遊びの庭だった。時々、朝礼があり運動場に皆な集まる。先生が高い所からいろいろ言った後、急に大きな声で、[天皇陛下の・・・]と始めるとすかさず、別の先生が[キヲツケ]と号令をかける。先生は[天皇陛下のおん為、お国の為・・・、勇敢に・・・、当町二人めの戦死・・・、本校出身の・・・、軍神スギタタクミは・・・、勉強を、立派に、臣民は・・・]といろいろ怒鳴った。校長の話が終わると、別の先生が[最敬礼ナオレ]と叫んだ。あの4年前の[お召し列車]の天皇と、タクミの二言は初耳では無かった。天皇さまはお元気なのに、僕の（タクミ）伯父さんは、何時帰って来るのかな。私は、軍神匠（1932年(昭和7年)10月10日満州事変で戦死、享年22歳）の杉田家の一人として特別に扱われていた様だ。

1937年（昭和十二年）10月に父親（順一）が東京大森の工場（通称東京ガス電）で働くことになって、東京大森第三小学校（3年生）に転校した、田舎になかった石の建物があちらこちらにあり、屋根が続いて見える家がゴミゴミと並んでいた。学区は家からすぐで運動場は狭く見えた。茅ヶ先では、母親に[マガハシ]だよと怒鳴られ、学校では校長先生から[軍神スギタタクミ]と怒鳴られ、毎日怒らされている様で学校（勉強）も母親（女の人）も嫌いになっていた。大森の新しい家の外の柱には（長橋順一）と書いた板が貼ってあった。

変わったことが起こり始めた。[長橋]さん、・・・君、タモちゃんと呼ばれ始めた。当たり前のことだが、杉田でも軍神でも匠でもない、一匹の悪餓鬼[長橋保]として放たれた。東京には、新しい遊び場の庭が沢山あり、尽きることはなかった。学校もその一つに庭で、勉強と名のつくこと（宿題も）はやらなかった。図画、工作、唱歌、体操、特に学芸会は大好きであった。在学中3年間は、少年団の音楽隊で進軍ラッパを吹き（太鼓、クラリネット等すべての楽器をこなした）、特に消灯ラッパの替え歌（新兵さんは可哀想だよー。）の調べは哀愁ただよい涙を誘って本当に可哀想だった。

蒲田界隈の新興文化、浅草六区界隈の大衆文化の真似事を身につけた。世間は、勝った、勝った提灯行列、大人たちは勝ち戦に沸いて天皇陛下万歳、万歳、万歳は我が幼き胸を刺した。この様な風潮に何と無く背を向けていた。

中学受験は不合格、大森区内の尋常高等学校1年に留年する。来年は、失敗は出来ない、初めての勉強、問題集を買い込んで始める。体格が良いだけで1942

年（昭和 17 年）4 月 1 日現日本体育大付属旧制荏原中学校学合格、定期券は毎日何回も乗れるので面白かった。学校には、何時も無口の配属将校と、号令をかけ歩き回る退役軍人がいた。教練で三八銃を握ったのが戦争を肌にした最初で、校庭に土袋で囲った中に機関砲が有り遊んでいたら、グラマン戦闘機の攻撃を受けたのが最初にして最後の実戦経験であった。当校での学徒動員は、密集家屋の間引取壊し作業、次ぎは三菱重工業下丸子工場（主に 30 トン戦車、上陸用舟艇の組立ての溶接、リベット打ち、厚鋼板の擦り合わせ）物作りは得意の分野で楽しかった。六郷川で遊ぶ度に仰ぎ見ていた練習飛行機（通称アカトンボ）に乗りたく、満 14 歳で陸軍少年航空学校受験、猛烈な勉強のたたりで近乱視になり落ちる。これが幸い、今がある。父親の転職（日立航空機千葉工場）で、1944 年（昭和 19 年）11 月旧制千葉県立千葉中学校（3 年生）に転校、引き続き勤労働員（日本建鉄船橋工場）に行く、戦闘爆撃機 [雷電] のエンジンのカバー、ジュラルミンの加工である。免除されていた熟練工にも赤紙が来る様になって、不良品が続出した。見よう見まねの鍛冶職人の弟子熟練工松茸モドキも三菱重工での年期が入っていた。自称悪餓鬼タモツの出番となる。斯様な物作りは血筋の天性なのかも、戦争に関わるハードな実体験はなく私は映画好きな少年で戦争映画を見ていた様に、1945 年（昭和 20 年）8 月 15 日 12 時、学校工場前庭炎天下で玉音なるものを、ジイジイガアガアと聞かされた。証言を終えるに当たって思う。勝つ当てのない戦争を始めた責任と、遅れた敗戦の決断の責任、誰が取るのか玉音では [戦争の昭和] は終わらない。課題の [葬送の幼き思い] 怨念の決着は 76 年後の今も着いてない [三の子の魂] 百までどういたせうか。

秋葉ていさん証言（35 歳、主婦、成東町木戸）

あの時、私は三十五歳ぐらいでしたね。（1911 年（明治 44 年）7 月 6 日生まれ）主人は北支の南セッキョウ（編集委員注：中国山東省石橋）というところで戦死したんです。その主人の遺骨を貰い受けに役場へ行くと私よりもずっと年輩のご婦人がいて、黒い着物を着て私にきくんです。「どなたを亡くされたんですか。」ってね。私が「主人を」と答えるとそのご婦人は、「お気の毒に。あなたはまだいい。」って言うんですよ。その方は、「私はたった一人しかいない息子を亡くしました。これで、世界中、もうどこへいっても、どこを探しても私の子供はいないんです。」って。そういう悲しい人が周り中にいっぱいいたのよ。でも誰を亡くしたって悲しみは同じはずよね。必死で泣くまいとしたけれど、遺骨を包んである白い布を見てそれを渡されると、もうあたりはばからず

涙が出て止めようもなかったですよ。今でも忘れようがありません。

それから、兄弟も三人戦争にとられ残された私も生きていく事に難儀しましたね。

終戦は昭和二十年、国から戦争未亡人としての年金が支払われるようになったのが昭和二十八年、その間の苦労は今の人には、到底わかってもらえないでしょう。何がなんでも、子供達と自分が生きていかななくてはならない、あの辛さ、大変さなんと言葉になるか見つかりません。配給もありましたが配給は、家族の人数で配られたのですが、一人暮らしの人は後回しにされる状態で残りのカスのような物しか手に入らなかったと聞いています。役場では、配給は公平に配らなくてはいけないのに、それをしないで隠しておいたとも聞いています。

私の家にも疎開で来ていた人がいて、その人の取り分を役場に申請に行ったのですが役場の人は、疑わしそうに私を見て「その人、別ナベしてませんか」といわれるの。別ナベって今で言えば、二重取りの様なもの。否定しても「よく調べてから、決定します。」とだけ言われ、から戻りしてきた事を覚えています。非情と思いました。苦しい中で生活を切り一人分をまかなっていたんです。主人はね、昭和二十年三月十九日に出征して六月二十一日に戦死しました。もう少しで終戦であったのに、今でも歯ざしりするほど悔しい。悔やみきれないです。

「俺は、腹へらし坊だから東京のおばさんが面会に来るときは、東京名物のうまいもんを差し入れしてもらおう。」と笑っていたのが忘れられません。いざ、面会申し入れたときは、もう、戦地へ向かってしまった後でね。それっきりでした。

私も泣いてばかりはおられず子供はあるし夫の両親は年を取っているし、私しか働ける人がいなくて再婚を勧められ、再婚をしました。そして、ほそぼそと生きてきたんです。聞いてくれる人がいて、ありがたい。あのことは、本当に生きている限り忘れようがないんです。(千葉県山武郡成東町役場 2001 年発行「戦争を語りつぐ、永遠に平和でありますように」から)

(編集委員注)

秋葉収司さんは、2歳の時、父君良祐さんが応召され、3歳の時に戦死された。だから、秋葉さんは父君の顔も覚えていないし、遊んでくれたことも覚えもない。秋葉収司さんには、誠さんと美代子さんの兄と姉がいたが、貧困なるが故に、秋葉ていさんの働き過ぎと母乳不足が原因でそれぞれ2歳、3歳で亡くなっている。誠さんは赤痢(エキリ)に感染してなくなった。父君応召中に母君が自転車転倒で右足骨折の大怪我をされて子どもの面倒が見られない時もあるって、子どもに苦勞をかけたと母君は、回顧されている。秋葉ていさんは、夫の死後、

夫の弟圭助さんと再婚されたので、秋葉収司さんにとって、叔父の圭助さんが育ての父君となる。この再婚の話は、母君に事前の相談もなく決まってしまった。この時、兄一雄さんと姉すみ子さんは、いずれも成人していた。未成年の私と弟だけが養子になった。

秋葉収司さんが高校進学の際、母君はどうしても定時制でなく全日制成木高校普通課程に入れてやりたいと努力したが、秋葉さんはあえて定時制を選択した。1町2反（3600坪）の田畑を耕作するには、祖父母は高齢化し、養父も戦争で傷害を受けており、秋葉さんの労働力が求められていた。定時制高校（4年制）を選ぶことによって、日中は母君と家族を助けて農業に従事することができた。当時の第二人はそれぞれ小学生と中学生であった。

定時制高校卒業と同時に、日本国有鉄道に就職受験したが、父親が不在のために連帯保証人が二人必要であった。叔父と叔父の友人の二人に保証人になって貰って、採用になった。機関助士、電気・電車の運転士に合格し、定年まで42年間、無事故で退職できた。これは亡き父君が見守ってくれたと思う。職場では労働条件を改善するために労働組合「全動労」で活動したが、中核・革マルの妨害と15年間たたかったが、これは母君の「命をかけて運動しなさい」と言う教えに負うところが多い。

母君が作られた色紙には「教育と戦争、くり返すまいこの過ちを。教育と戦争、くり返すまいこの過ちを。教育と戦争、くり返すまいこの過ちを。」と書かれている。この気持ちは、戦争を二度と繰り返してはならないと、5人の子どもが小さい時から常日頃教えられてきた思いである。憲法を変えて、再び戦争の道になることがあったら命をかけて運動するよう教えたものである。

秋葉さんは、この母君の色紙と写真を持って、2005年4月28日-5月4日にアメリカ合衆国ニューヨークの国連本部で開催されたNPT（核兵器不拡散条約会議）にNGO 民医連代表（千葉市今井町診療所健康友の会事務局長）として参加している。世界から4万人、日本から700人参加した国際的な行動に貢献できた。これは、まさしく母君の願いでもあった。

母君は、1911年（明治44年）7月6日生まれで元気であるが、「この世の中に戦争の恐れがなくなり、本当に平和になれば私は夫のもとに行く」と言われている。

母君の約100年の歴史については、母君の自筆の長い記録がある。この記録が刊行されれば、戦前の女性の、母の苦しみが理解できると思う。

